

令和4年3月16日

IR・EM委員会

IR情報による八戸学院大学短期大学部の教育課程の検証について

短期大学部の教育課程について IR 情報を用いて、短期大学部の3つの方針を意識した、3つの領域「A 学生の学ぶ意欲・姿勢」「B 教育の質」「C 学修成果」から分析し検証を試み、3領域で根本的な問題がないと判断できた場合、教育課程の適切性が担保されていると結論づけることとします。

1. 各領域の検証における IR 情報について

各領域の分析・検証に用いた IR 情報は以下に示す通りです。

「A 学生の学ぶ意欲・姿勢」の分析・検証に用いた IR 情報

- ①2020 年度生の卒業時の単位取得状況【資料 A -①】(p3)
- ②学習時間・学修行動に関する調査結果(2020 年度後期/2021 年度前期実施)
 - Q『授業期間の学生の1日あたりの学習時間』【資料 A -②】(p3)

「B 教育の質」の分析・検証に用いた IR 情報

- ①卒業時アンケート(2018 年度生)【資料 B -①-1 から 3】(p4)
 - Q5「知識や能力を身に付けるために、大学教育は役に立ったと思いますか」
 - Q6「学生生活に関した支援についてどう思いますか」
 - Q1 から 4「短期大学部の評価」

「C 学修成果」の分析・検証に用いた IR 情報

- ①2022 年度生の卒業時 GPA の結果【資料 C -①-1】(p5)
- ②卒業生に関する就職アンケート 幼児保育学科の 2016・2017 年度生
(令和元年 11 月/令和 2 年 8 月実施)【資料 C -②-1 から 3】
 - Q2-1『卒業生の能力評価』(p5)
 - Q2-2『施設への貢献度』(p6)
 - Q3『本学の学生に望むこと』(p6)
- ③2021 年度八戸学院大学短期大学部 2020「学修成果の把握」調査報告書(2020 年度生/2021 年度生)
【資料 C -③】(p7 以降)

2. 各領域の検証の結果について

IR 情報を用いた教育課程の分析・検証の結果については以下に示す通りです。

「A 学生の学ぶ意欲・姿勢」について (p3)

幼児保育学科の教育課程においては、卒業、保育士資格及び幼稚園教諭二種免許状の取得の必要単位数は90前半、介護福祉学科の卒業必要単位数は94単位であるが、両学科とも総平均取得単位数であっても、一定の割合を上回っています（幼児保育学科102単位、介護福祉学科99単位）【資料A-①】。

このことから、修学期間内、学生はアドミッション・ポリシーに示す人物像に見合う意欲と姿勢を堅持していることが読み取れます。また、授業期間中の1日あたりの学習時間については、2020年度後期、2021年度前期分を再集計すると短期大学部全体（379名）で「1時間から2時間」に占める割合が最も高く（31%：107名）、それ以上の「2時間から3時間（以上）」も高い割合（28%：104名）になっています【資料A-②】。卒業時の総単位取得数から勘案される過密な1日の中、これだけの学習時間を学生自ら創出し学びに向き合う意欲と姿勢を確認することもできることから、この領域の根本的な問題はないと考えられます。

「B 教育の質」について (p4)

2018年度生の卒業時アンケートの6項目において肯定的な評価「とても役立った/役立った」が、占有しています。保育者としての専門的な知識・技術、社会人基礎力にかかわるものの見方・考え方、問題解決力などディプロマ・ポリシーにある力の育成に対する教育効果の認識が読み取れます【資料B-①-1】。学びを支える生活の支援もすべての項目が肯定的な傾向にあり（66%以上）（【資料B-①-2】、短期大学部の全体的な評価の4項目においても肯定的な評価「強く思う（非常に満足）/思う（満足）」は、高い割合（78%以上）となっています【資料B-①-3】。

これらのことから、この領域の根本的な問題はないと考えます。しかしながら、教育の質の精緻な分析、検証には、複数年度の卒業生を対象とした結果を統合した情報による検証及び、教育課程を構成する科目に対する授業評価アンケートの情報等を加えることが欠かせないと思われれます。

「C 学修成果」について (p5からそれ以降)

2020年度生の卒業時のGPA平均（幼児保育学科3.1、介護福祉学科2.96）から、学生は科目の学修成果を高い水準で獲得していることが読み取れます【資料C-①-1】。幼児保育学科の2016年度から2018年度生（181人）の就職先での能力評価においても、3項目「保育に関する知識・技術をもって適切な判断ができる」「問題解決能力がある」「自己管理能力がある」を除く、7項目で肯定的な評価「とてもある/ややある」の割合が最も多く占め（63%以上）【資料C-②-1】、施設への貢献度は、肯定的な評価「大いに貢献している/貢献している」の割合（79%）が大部分を占めています【資料C-②-2】。これらの能力評価の3項目の内容は、今後の本学学生に望むことの「仕事に対する積極性」「社会人としての礼儀作法・言動等」【資料C-②-3】に関連する可能性があり、教育課程（科目内容）の内容等において意識する必要があるかもしれません。そして、本学の学修成果は、就職後にも通用する水準であると言えます。

また、学生自身の学修成果の主観的な評価の結果である【資料C-③】においても、学生自身が学びの積み上げ、成長を実感できていることが多くの項目で読み取れることから、この領域において根本的な問題はないと考えます。しかしながら、教育の質の精緻な分析、検証には、カリキュラムの領域ごと「教養/専門」の成績評価の割合やGPAなどの情報等を加えることが欠かせないと思われれます。

資料A-① 2020年度生 卒業時の単位取得およびGPA

	幼児保育学科 (80名)	介護福祉学科 (20名)
総取得単位数平均	102	99
最大	108	100
最小	89	98
中央値	102	100
標準偏差	2.477	0.733

資料A-② 短期大学部における学修時間・学修行動に関する調査結果 [Q授業期間中の学生の1日あたりの学習時間]

幼児保育学科	学年	回答者数	1: 0から30分	比率	2: 30分から1時間	比率2	3: 1時間から2時間	比率3	4: 2時間から3時間	比率4	5: 3時間以上	比率5
2020年 後期実施	1年生	82	12	15%	31	38%	25	30%	10	12%	4	5%
	2年生	74	24	32%	23	31%	15	20%	9	12%	3	4%
2021年 前期実施	1年生	84	13	15%	20	24%	30	36%	12	14%	9	11%
	2年生	76	18	24%	12	16%	18	24%	10	13%	18	24%
1年生		166	25	15%	51	31%	55	33%	22	13%	16	10%
2年生		150	42	28%	35	23%	33	22%	19	13%	21	14%
幼児保育学科全体		316	67	21%	86	27%	88	28%	40	13%	38	12%

介護福祉学科	学年	回答者数	1: 0から30分	比率	2: 30分から1時間	比率2	3: 1から2時間	比率3	4: 2から3時間	比率4	5: 3時間以上	比率5
2020年 後期実施	1年生	21	1	5%	4	19%	8	38%	6	29%	2	10%
	2年生	10	1	10%	2	20%	3	30%	2	20%	2	20%
2021年 前期実施	1年生	20	2	8%	3	17%	5	25%	3	17%	7	33%
	2年生	12	0	0%	2	15%	4	30%	2	20%	4	35%
1年生		41	3	6%	7	18%	13	32%	9	23%	9	21%
2年生		22	1	5%	4	17%	7	30%	4	20%	6	28%
介護福祉学科全体		63	4	6%	11	18%	20	31%	14	22%	15	24%

1年次全体		207	28	13%	59	28%	68	33%	31	15%	22	11%
2年次全体		172	43	25%	39	23%	40	23%	23	13%	27	16%
短期大学部全体		379	70	19%	98	26%	107	28%	54	14%	52	14%

※2つの実施時期の学年は全てが同一の集団を表すものではない(後期実施の1年生と前期実施の2年生が同一集団)。

資料B-①-1 卒業時アンケート「Q5知識や能力を身につけるために、大学教育は役にたったと思いますか」

【4:とても役に立った 3:役に立った 2:あまり役に立たなかった 1:役に立たなかった】

項目	評価	4	比率 (%)	3	比率 (%)	2	比率 (%)	1	比率 (%)	合計
1) 専門分野に関する知識・理解	2018年度生 (28人)	14	50%	14	50%	0	0%	0	0%	28
2) 将来の仕事に関連する知識・技能	2018年度生	13	46%	15	54%	0	0%	0	0%	28
3) 幅広い知識・ものの見方・考え方	2018年度生	11	39%	17	61%	0	0%	0	0%	28
4) 問題を見つけ、解決方法を考える力	2018年度生	5	18%	23	82%	0	0%	0	0%	28
5) 地域社会の発展に貢献する力	2018年度生	7	27%	19	73%	0	0%	0	0%	26
6) コミュニケーション能力	2018年度生	10	36%	18	64%	0	0%	0	0%	28

資料B-①-2 卒業時アンケート「Q6学生生活に関する支援についてどう思いますか」

【4:強くそう思う 3:思う 2:思わない 1:全く思わない】

項目	評価	4	比率 (%)	3	比率 (%)	2	比率 (%)	1	比率 (%)	合計
1) 学生指導に熱心な教員・職員が多い	2018年度生 (29人)	5	18%	19	68%	3	11%	1	4%	28
2) 学修を支援する体制(奨学金など経済的支援)が充実している	2018年度生	7	25%	17	61%	4	14%	0	0%	28
3) 学生生活を支える体制(学生相談室・ハラスメント相談)が整っている	2018年度生	4	14%	18	64%	6	21%	0	0%	28
4) 学修関連の施設(図書館、実習室・教室等)や設備が充実している	2018年度生	5	18%	19	68%	4	14%	0	0%	28
5) スポーツ関連の施設や設備が充実している	2018年度生	3	11%	15	54%	9	32%	1	4%	28

資料B-①-3 卒業時アンケート 短大評価

項目1) 3) 4) 【4:強くそう思う 3:思う 2:思わない 1:全く思わない】 項目2) 【4:非常に満足 3:満足 2:やや満足 1:非常に不満足】

項目	評価	4	比率 (%)	3	比率 (%)	2	比率 (%)	1	比率 (%)	合計
1) あなたは、本学に入学してよかったと思いますか。	2018年度生 (29人)	5	18%	19	68%	3	11%	1	4%	28
2) あなたは卒業後の道路に満足していますか。	2018年度生	7	25%	17	61%	4	14%	0	0%	28
3) 入学から卒業までの学生生活は充実していたと思いますか。	2018年度生	4	14%	18	64%	6	21%	0	0%	28
4) あなたは本学への進学を誰かに勧めたいと思いますか。	2018年度生	5	18%	19	68%	4	14%	0	0%	28

資料C-①-1 2020年度生 卒業時のGPA		
	幼児保育学科 (80名)	介護福祉学科 (20名)
GPA平均	3.1	2.96
最大	3.9	3.78
最小	1.91	1.52
中央値	3.14	3.26
標準偏差	0.475	0.733
保育士資格+幼稚園教諭2種免許状 (72名)		
保育士資格のみ (2名)		

資料C-②-1 卒業生に関するアンケート「本学卒業生の能力評価」															
【5・とてもある 4・ややある 3・どちらともいえない 2・あまり感わない 1・まったく感わない】															
項目		評価	5	比率 (%)	4	比率 (%)	3	比率 (%)	2	比率 (%)	1	比率 (%)	無回答	比率 (%)	合計
1) コミュニケーション能力がある	令和2年4月採用 (2018年度生)	件数(社)	11	29%	24	39%	7	17%	7	10%	0	1%	2	4%	181
	平成31年4月採用 (2016・17年度生)		41		47		24		12		1		5		
2) 理解力がある	令和2年4月採用 (2018年度生)	件数(社)	12	25%	26	43%	9	17%	2	10%	0	0%	2	4%	181
	平成31年4月採用 (2016・17年度生)		34		52		22		17		0		5		
3) 保育に関する知識・技術をもって適切な判断ができる	令和2年4月採用 (2018年度生)	件数(社)	5	14%	23	38%	15	34%	5	9%	0	1%	3	4%	181
	平成31年4月採用 (2016・17年度生)		20		46		47		11		1		5		
4) 責任感を持って職務を遂行できる	令和2年4月採用 (2018年度生)	件数(社)	14	31%	23	38%	9	17%	2	8%	0	1%	3	5%	181
	平成31年4月採用 (2016・17年度生)		43		45		21		13		2		6		
5) 問題解決能力がある	令和2年4月採用 (2018年度生)	件数(社)	4	14%	19	31%	19	34%	6	15%	0	1%	3	6%	181
	平成31年4月採用 (2016・17年度生)		21		37		43		21		1		7		
6) 自己管理能力がある	令和2年4月採用 (2018年度生)	件数(社)	15	24%	18	35%	12	25%	3	9%	0	2%	3	4%	181
	平成31年4月採用 (2016・17年度生)		28		46		33		14		4		5		
7) 協調して仕事ができる	令和2年4月採用 (2018年度生)	件数(社)	21	38%	16	34%	9	19%	1	3%	1	2%	3	4%	181
	平成31年4月採用 (2016・17年度生)		47		45		26		5		2		5		
8) ルールに従って行動できる	令和2年4月採用 (2018年度生)	件数(社)	21	44%	20	37%	6	12%	1	3%	0	0%	3	4%	181
	平成31年4月採用 (2016・17年度生)		58		47		15		5		0		5		
9) 行事等に積極的に参加する	令和2年4月採用 (2018年度生)	件数(社)	20	41%	19	32%	8	18%	2	4%	0	0%	2	4%	181
	平成31年4月採用 (2016・17年度生)		55		39		25		6		0		5		
10) 向上心がある	令和2年4月採用 (2018年度生)	件数(社)	19	35%	14	31%	13	23%	2	4%	0	1%	3	5%	181
	平成31年4月採用 (2016・17年度生)		45		42		29		6		2		6		

資料C-②-2 卒業生に関するアンケート「本学卒業生の貴施設への貢献度について」

【5:大いに貢献している 4:貢献している 3:どちらともいえない 2:あまり貢献していない 1:貢献していない】

	評価	5	比率 (%)	4	比率 (%)	3	比率 (%)	2	比率 (%)	1	比率 (%)	無回答	比率 (%)	合計
令和2年4月採用 (2018年度生)	件数(社)	18	30%	23	49%	4	8%	1	3%	0	2%	5	8%	181
平成31年4月採用 (2016・17年度生)		37		65		11		4		3		10		

資料C-②-3 「今後、本学学生に望むこと（複数回答可）」

複数回答可

項目		回答数	合計	比率
1) 保育に必要な基礎的な知識・技術	令和2年4月採用 (2018年度生)	18	49	14%
	平成31年4月採用 (2016・17年度生)	31		
2) 仕事に対する積極性	令和2年4月採用 (2018年度生)	31	67	19%
	平成31年4月採用 (2016・17年度生)	36		
3) 仕事を完遂させる責任感	令和2年4月採用 (2018年度生)	17	45	13%
	平成31年4月採用 (2016・17年度生)	28		
4) 職場内での協調性	令和2年4月採用 (2018年度生)	28	55	15%
	平成31年4月採用 (2016・17年度生)	27		
5) 仕事の処理能力	令和2年4月採用 (2018年度生)	9	23	6%
	平成31年4月採用 (2016・17年度生)	14		
6) 社会人としての礼儀作法・言動等	令和2年4月採用 (2018年度生)	30	69	19%
	平成31年4月採用 (2016・17年度生)	39		
7) 保護者や利用者から信頼される人柄	令和2年4月採用 (2018年度生)	23	50	14%
	平成31年4月採用 (2016・17年度生)	27		
	合計		358	

資料 C-③

2021 年度八戸学院大学短期大学部「学修成果の把握」調査報告

2021 年 10 月 15 日

IR・EM 委員会

1. 概要

本学幼児保育学科の学生は保育士資格および幼稚園教諭二種免許状、介護福祉学科の学生は介護福祉士資格の取得を目指して入学する。学生の日頃の学習の成果は、定期試験やそれに基づく GPA、実習評価等によって測定され、また、学修成果を示すパフォーマンスもさまざまな機会に披露される。それとは別に、彼らの在学中の成長をより包括的な視点で把握するため、「学修成果の把握」調査を企画・実施している。

調査の目的は学生自身の成長実感を把握し、ディプロマポリシーを検証すること、また、結果を授業やカリキュラム等の教育活動の見直しに繋げることである。そのため、2020 年度より継続して調査を実施し、学生の 2 年間の変遷を追跡しているところである。

2. 方法

(1)調査項目の作成

2020 年度に、各学科において学科長を中心としたプロジェクトチームを編成し、そこで学科のディプロマポリシーを基に評価の観点となる項目を作成した。評価のレベルは 4 段階（入学時を想定した第 1 段階から、卒業時に達していることが望ましい第 4 段階まで）とし、各段階の評価基準を分かりやすい短文で表現するよう、それぞれの観点の主たる担当教員に依頼した。その過程で観点の見直しを行い、評価基準となる文言はチームのメンバーが最終的に推敲した。結果として、両学科とも評価の観点は 17 項目となった。本年度にはいり、両学科とも調査項目の改善に取り組み、その内容は各学科のページに記載している。

(2)調査の実施

評価方法は自己評価とし、グーグルフォームを用いて 2021 年度前期の試験期間に全学生を対象に実施した。ここでは、第 1 回調査（2020 年度前期）から第 3 回調査（2021 年度前期）に行った計 3 回、主に 2020 年度入学生の縦断的な結果の比較から

検討を行う。そして、2021年度生（1回目）までの結果を示す。これは縦断的な調査であるが、2年間の学修期間をカバーしていないため、得られる知見も限定的なものとなる。

3. 幼児保育学科について

(1)結果の概要

幼児保育学科のディプロマポリシーは表1の通りである。

表1 幼児保育学科のディプロマポリシー

<ol style="list-style-type: none">1. 健全で豊かな情操と、保育の基盤となる教養や総合的な判断力を身につけている。2. 保育の専門的知識と技術を有し、子どもの発達過程に応じて豊かな保育環境を構成することができる。3. 保育者としての責務を理解し、他の保育者や専門職者と協働して、子どもの最善の利益を追求することができる。

本年度の2021年度入学生については、ディプロマポリシーの内容をより反映するよう、具体的には評価の観点項目に「情操」、「対人情操」「子どもの最善の利益」を加え、「教養」を外し、ディプロマポリシーとの対応関係の整理を行うとともに、評価基準の文言を加筆・修正を学科全体で試みた。

2020年度入学生の評価の観点のうち、①～④がポリシーの1、⑤～⑮がポリシーの2、⑯と⑰がポリシーの3に対応している。評価の観点、各項目の評価基準、2020年度生の3回の調査の結果を5～9ページに示す。

また、2021年度入学生の評価の観点のうち、①～④がポリシーの1、⑤～⑯がポリシーの2、⑰から⑲がポリシーの3に対応している。その結果を10～13ページに示すが、今回の分析からは、第1回目の調査であるため除外している。

スマートフォンのトラブル等で6名の学生が回答できなかったため、回収率は96.4%（回答者は1年生83人、2年生77人）、有効回答率は99.3%であった。

2020年度生の第1回調査から第3回調査における学修成果の獲得状況の変化を検討するために、「1年次後期と2年次前期」、「1年次前期と2年次前期」を対象として、カイ二乗検定を行った結果を以下に示す。

1年次後期と2年次前期において有意差が認められたのは、

⑤保育（ $\chi^2(3)=15.15, p=0.001$ ）、⑪教育実践（ $\chi^2(3)=8.00, p=0.045$ ）⑫ピ⑬⑮言葉・文学（ $\chi^2(3)=10.08, p=0.017$ ）⑯保育者の責務（ $\chi^2(3)=11.97, p=0.007$ ）⑰他

者との協働** ($\chi^2(3)=14.43, p=0.002$) の、計 5 の評価の観点 (17 項目中 5 : 29%) であった。

1 年次前期と 2 年次前期において有意差が認められたのは、

保育①学びへの態度 ($\chi^2(3)=14.32, p=0.002$) ②教養 ($\chi^2(3)=11.57, p=0.008$) ③音楽 ($\chi^2(3)=11.79, p=0.008$) ⑤保育 ($\chi^2(3)=33.04, p=0.000$) ⑥福祉・養護 ($\chi^2(3)=27.04, p=0.000$) ⑦乳児・保健 ($\chi^2(3)=22.67, p=0.000$) ⑧教職の意義・教育理論 ($\chi^2(3)=13.36, p=0.003$) ⑨子ども理解 ($\chi^2(3)=11.99, p=0.007$) ⑩障がい ($\chi^2(3)=23.27, p=0.000$) ⑪教育実践 ($\chi^2(3)=22.81, p=0.000$) ⑫ピアノ ($\chi^2(3)=32.19, p=0.000$) ⑬美術 ($\chi^2(3)=19.16, p=0.000$) ⑭健康・体育 ($\chi^2(3)=18.16, p=0.000$) ⑮言葉・文学 ($\chi^2(3)=22.61, p=0.000$) ⑯保育者の責務 ($\chi^2(3)=16.50, p=0.000$) ⑰他者との協働 ($\chi^2(3)=29.67, p=0.000$) の、計 16 の評価の観点 (17 項目中 16 項目 : 94%) であった。これらについては、結果 (割合棒グラフ) の評価の観点名の一重線の囲み文字 (1 年次前期と 2 年次前期の有意差のみ)、二重線の囲み文字 (1 年次後期も有意差あり) により示している。

幼児保育学科のカリキュラムの進行に伴い、高い段階の評価基準を選択する学生の割合がほぼ全ての評価の観点項目で増加していることが確認できる。

(2)ディプロマポリシーの検証

ディプロマポリシーの 3 に対応する「⑯保育者の責務」「⑰他者との協働」に関しては、1 年次と 2 年次の調査段階でより肯定的な評価基準を選択する学生の割合が増え、保育者としての職務内容・責任を理解し、他者との協働する力について、学生の成長実感を得ていることが読み取れる。

ディプロマポリシー 2 に対応する「⑤保育」から「⑮言葉・文学」においても、同様の上昇する推移にあり、子どもの健やかな心身の成長を支える保育者の専門知識・技術の獲得の実感を得ていることが分かる。

ディプロマポリシーの 1 に対応する「①学びへの態度」から「④判断力・課題解決力」の全てが評価段階 1 の減少は共通している。「②教養」は第 2 回調査 (1 年次後期) と第 3 回調査 (2 年次前期) の評価段階の推移が肯定的な方向に動き切れていないことが窺え、実習での経験による判断の自己基準の変化やカリキュラムの配置による影響も考えられる。とりわけ教養教育の難しさが顕著に現れているが、概ね学生は保育の基盤となる人間性や教養、総合的な判断力について、学生、自らの変化の認識があ

ることを読み取れることができる。

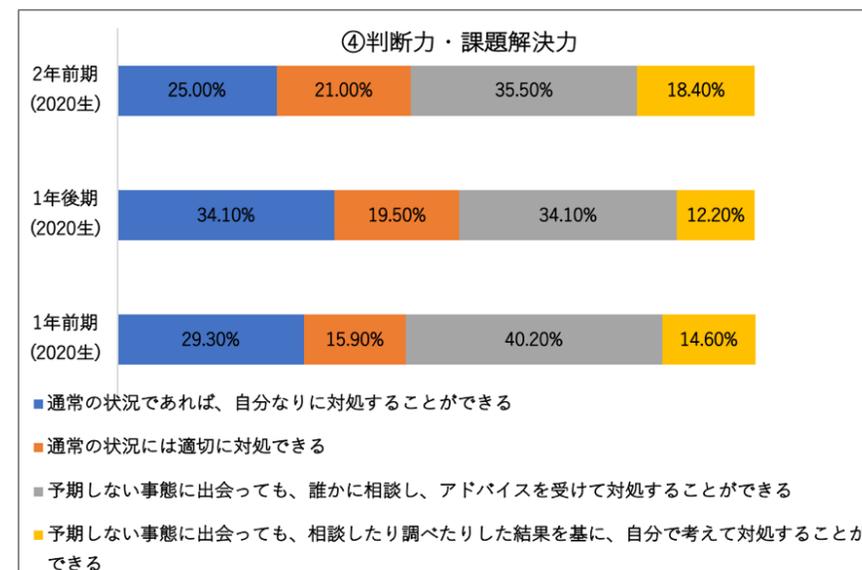
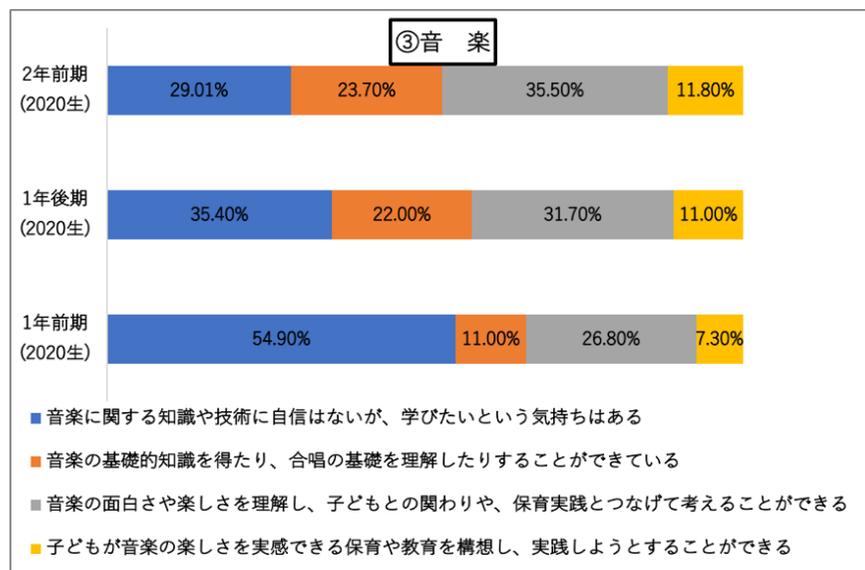
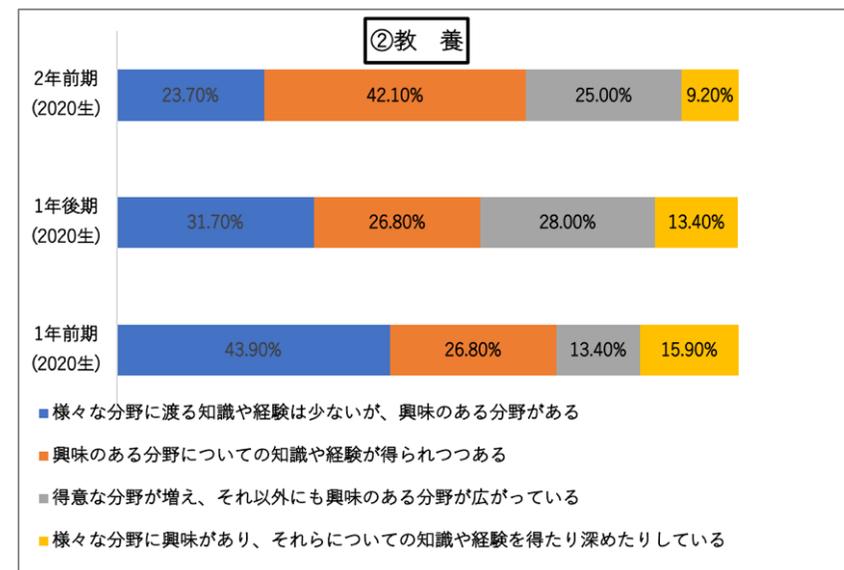
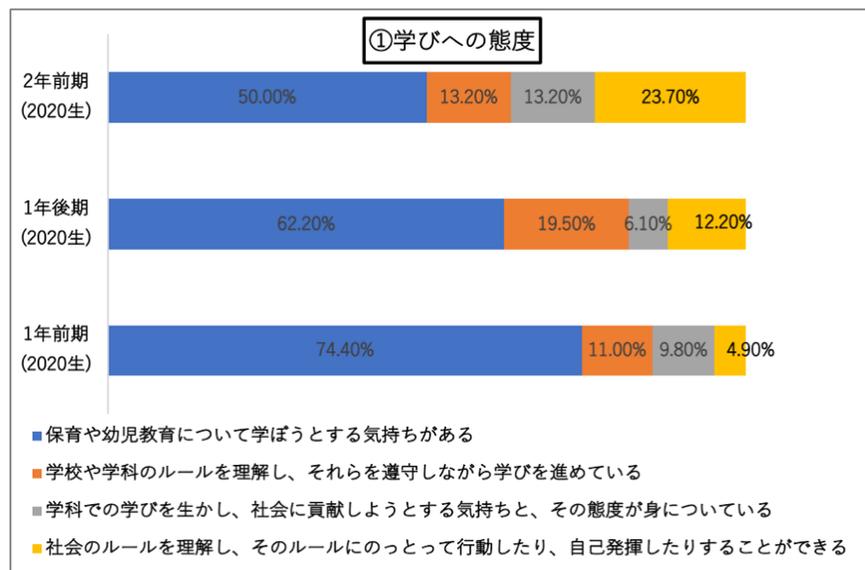
これらのことから、ディプロマポリシーの到達に向かう過程にあり、現時点において学生自身の主観的評価から幼児保育学科の教育課程の妥当性および効果性を確認することができる。

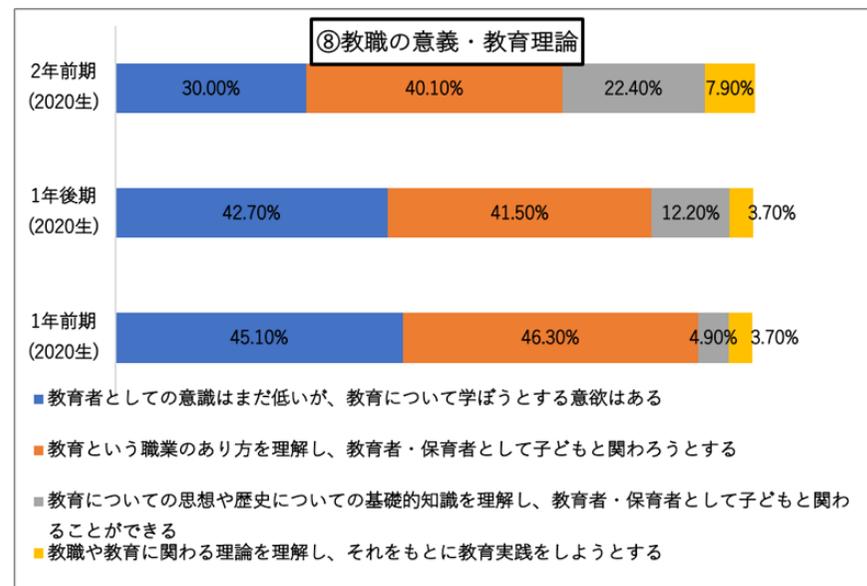
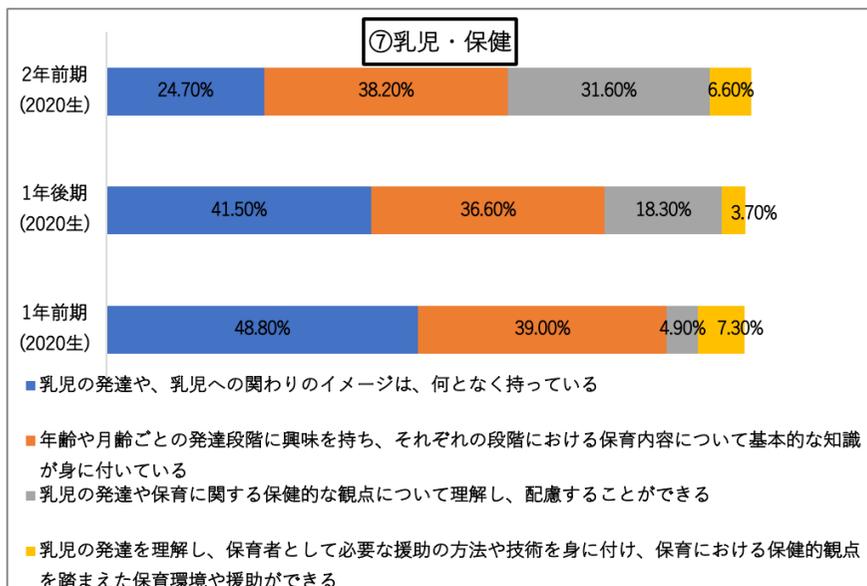
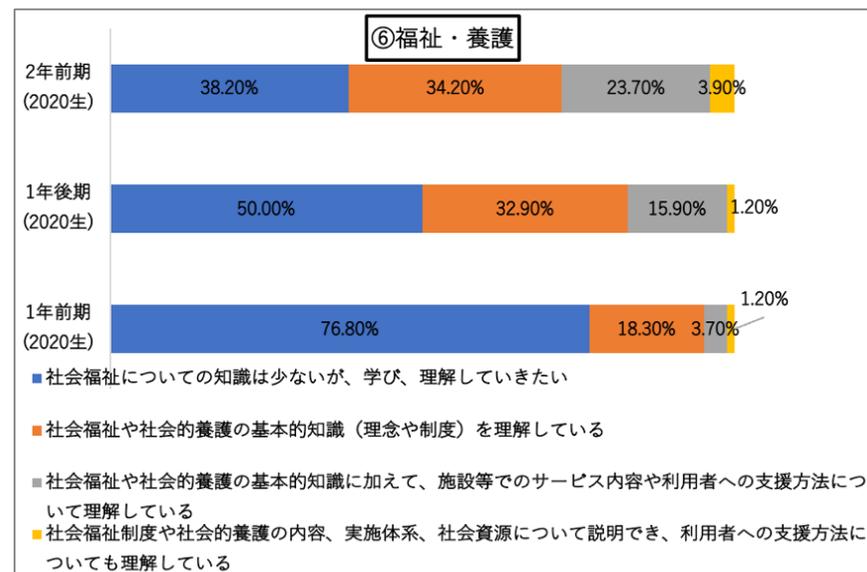
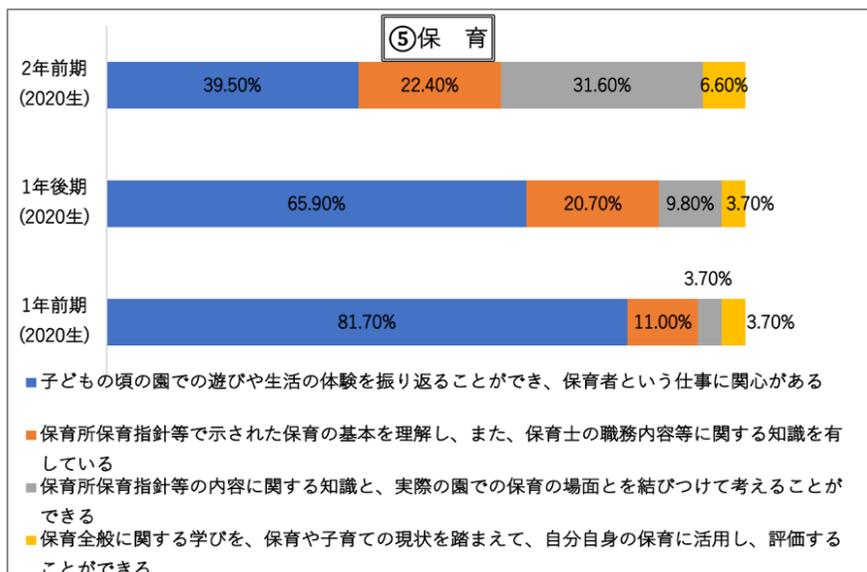
(3)教育活動の見直し

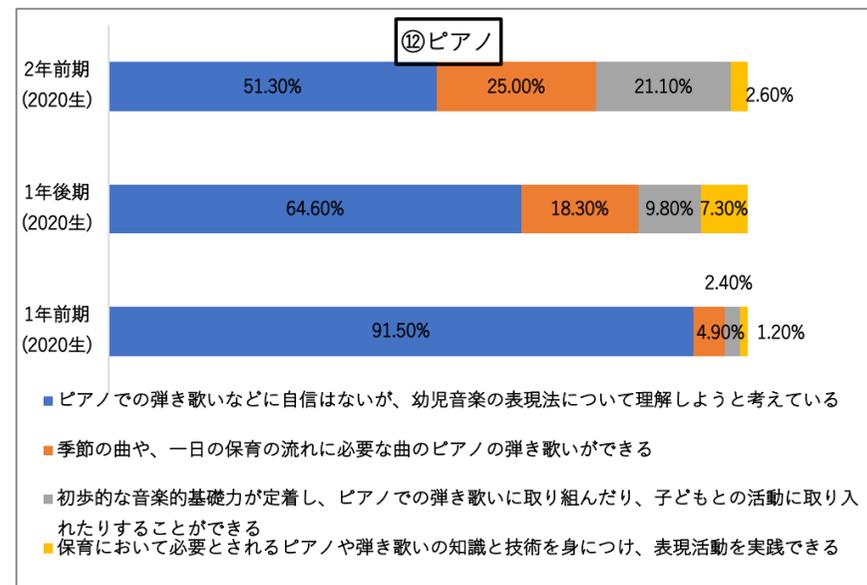
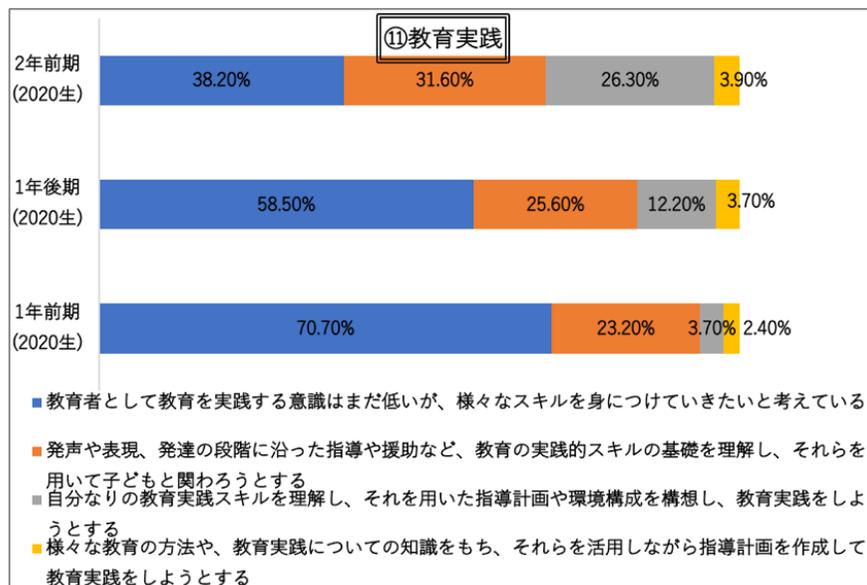
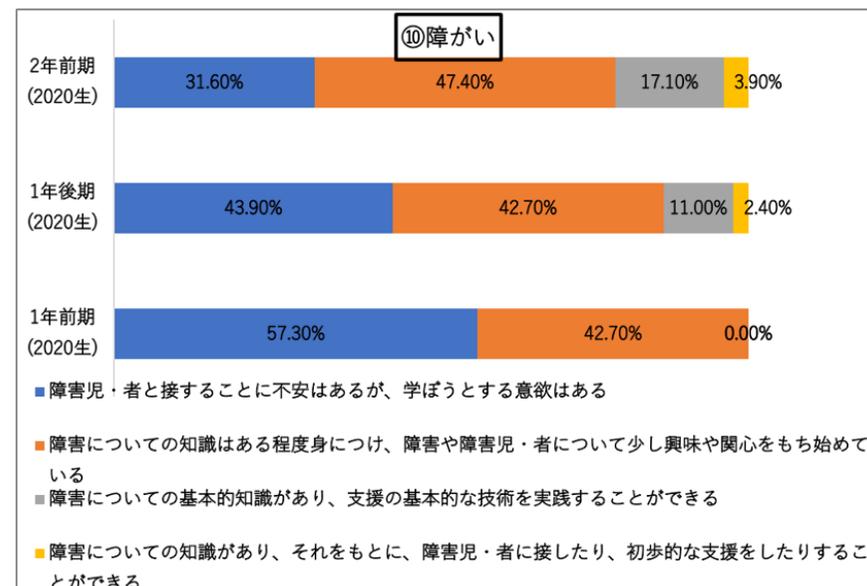
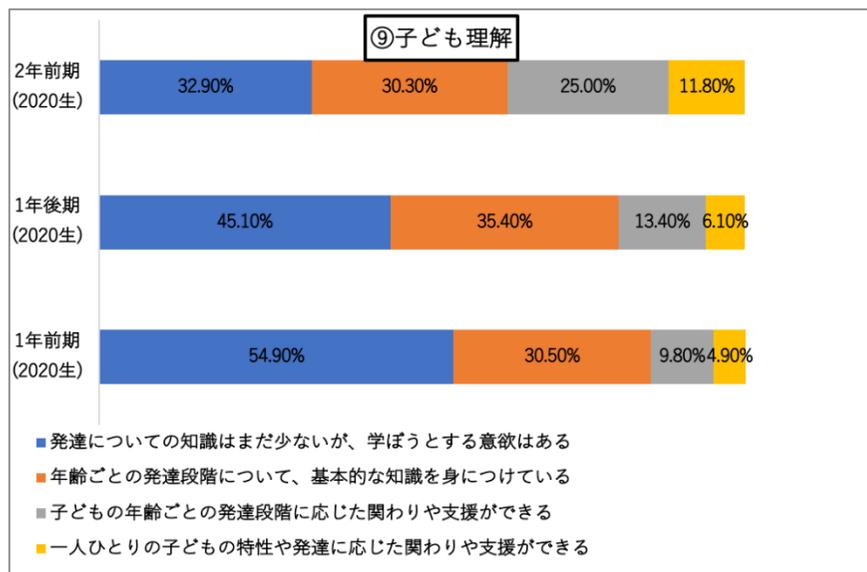
第1回調査（1年次前期）と第3回調査（2年次前期）では、ほぼ全ての評価の観点項目が肯定的な評価へ推移し学修成果の順調な到達を確認できる。このことから本学のカリキュラムの中で、学生は自身の成長や変化の実感を得ながら、人としての育ち、専門的な知識・技術の学びから、自らの目標に向かう歩みを進められていることが分かる。この点は学科として推奨している選択科目も含めて、学生が意識を持ち積極的な履修を行うことで学びの機会を多く得ていることの影響もあると推察される。

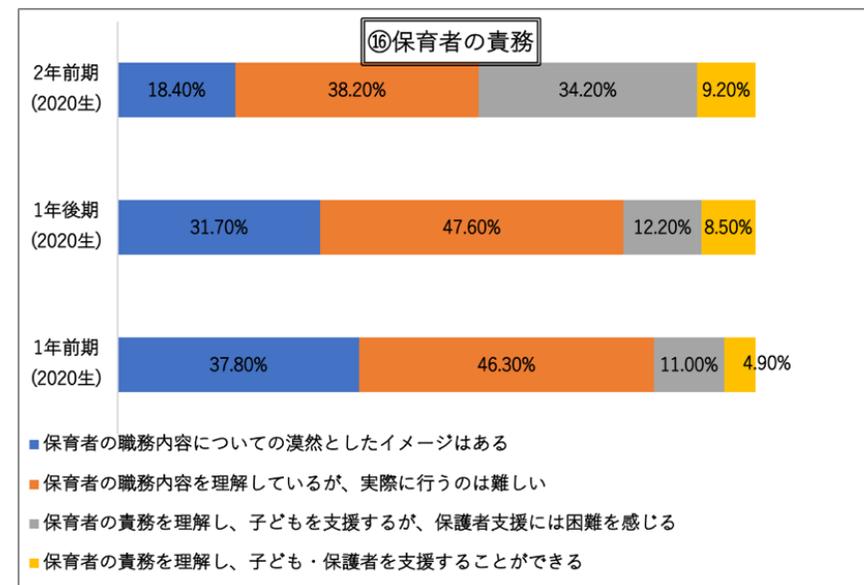
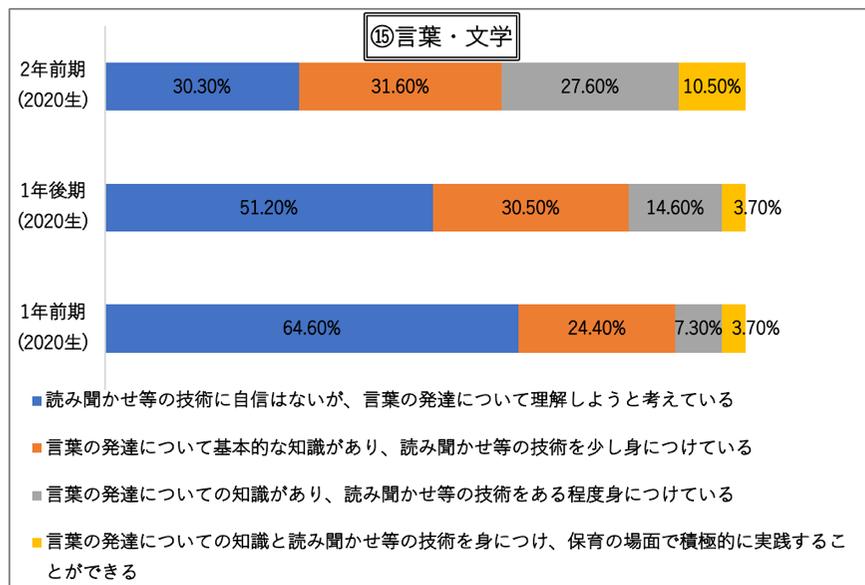
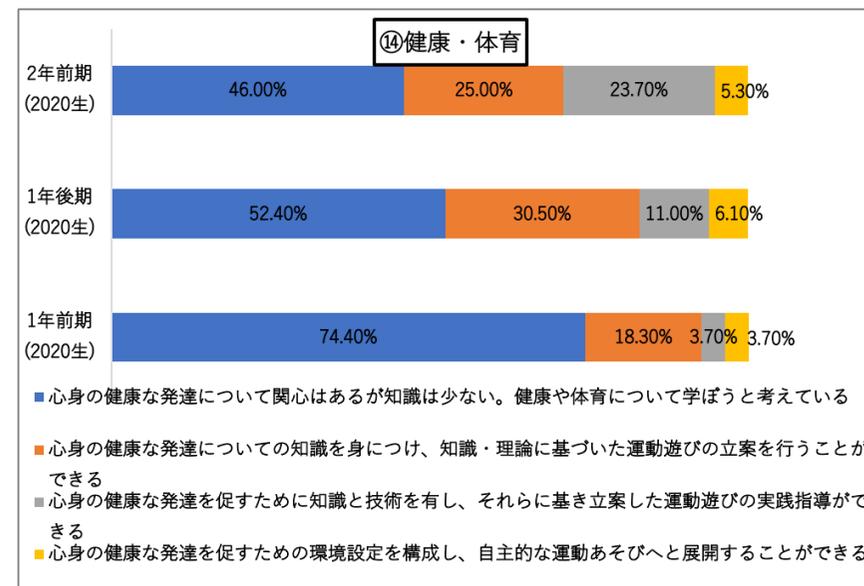
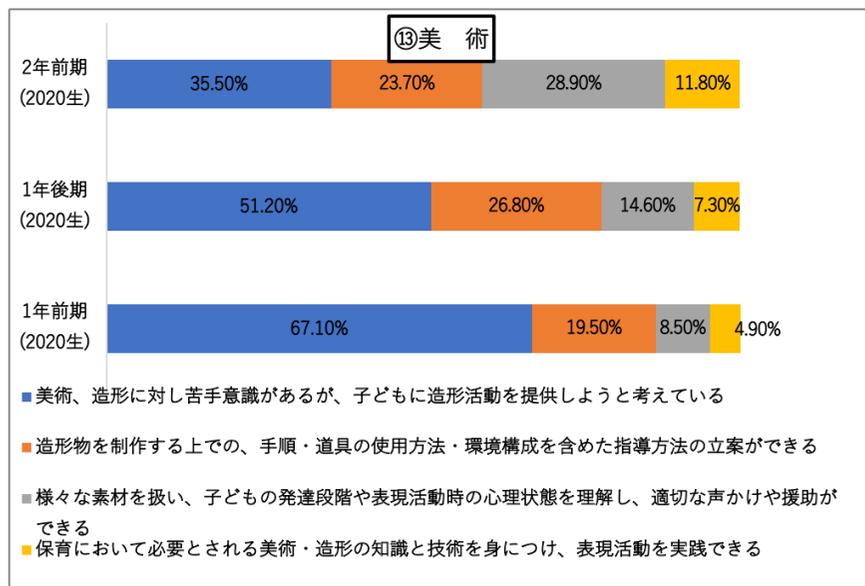
2年次の夏季には、保育所実習、幼稚園実習を経験し、これまで学習した知識や技術の成果の確認や成長する機会を得ている。この学生の育ちの現在位置を学科として共有し、ディプロマポリシーにある人材の育成に向けて、より教育効果を高める教育活動の継続と展開が求められるだろう。一方で、「判断力・課題解決力」には、評価段階の割合に大きな差は見受けられていない。特定の科目の開設ではなく、各教員が担当する授業運営においてアクティブラーニングの手法を意識し、演習、グループでの事例検討や問題・課題解決の機会を設けるなどの工夫から、学修成果の獲得を図っている。しかしながら、実習で体感した現場で求められる物事の判断や課題の解決水準の認識、日常での対人関係や出来事への対処とその結果なども影響し大きな変化になり難い可能性も窺われる。

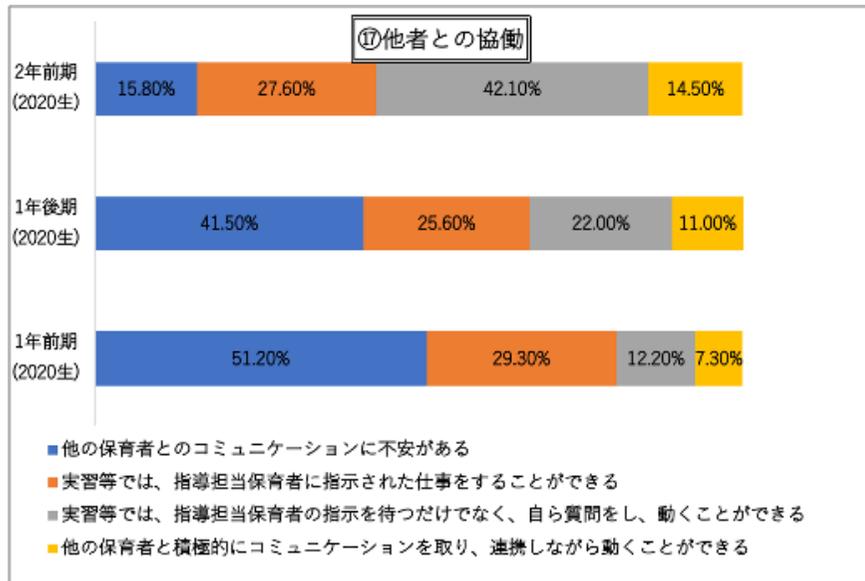
今後、学生の学修成果の主観的評価に加えて、成績評価などの客観的評価の指標も合わせた分析から、学科としての発展に向けて、教育活動の見直し、授業運営・内容の改善を続けていくことが必要であろう。

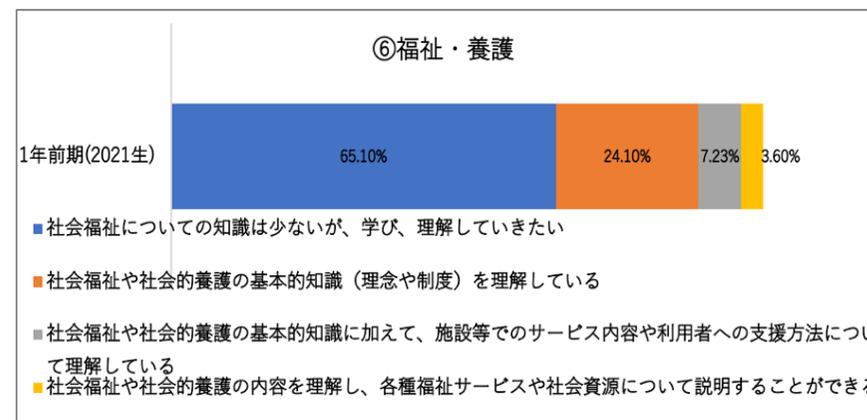
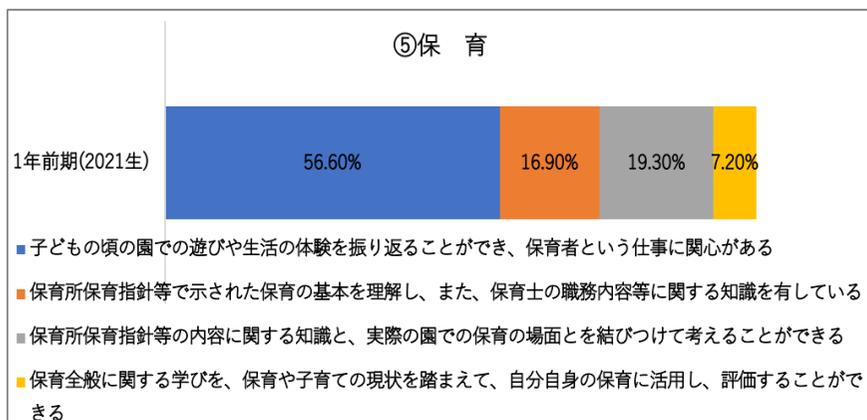
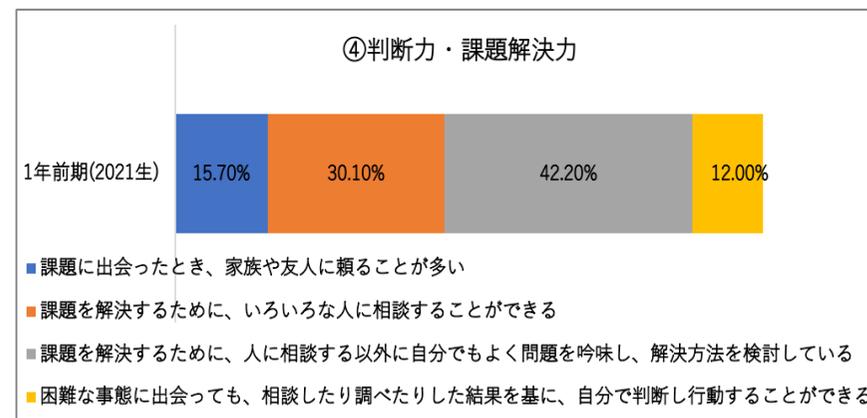
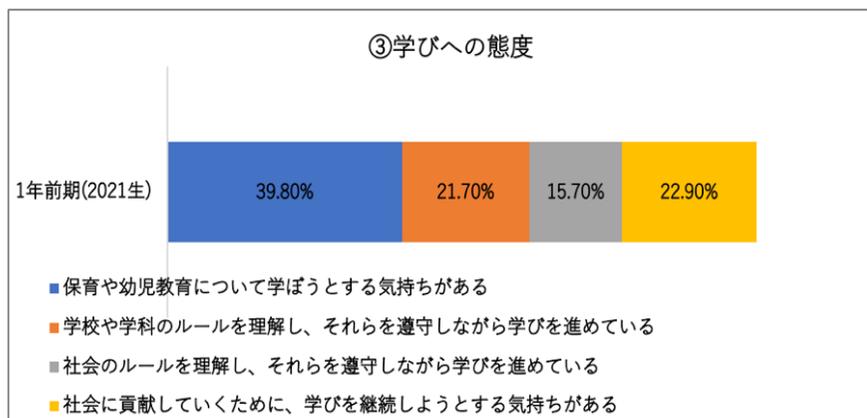
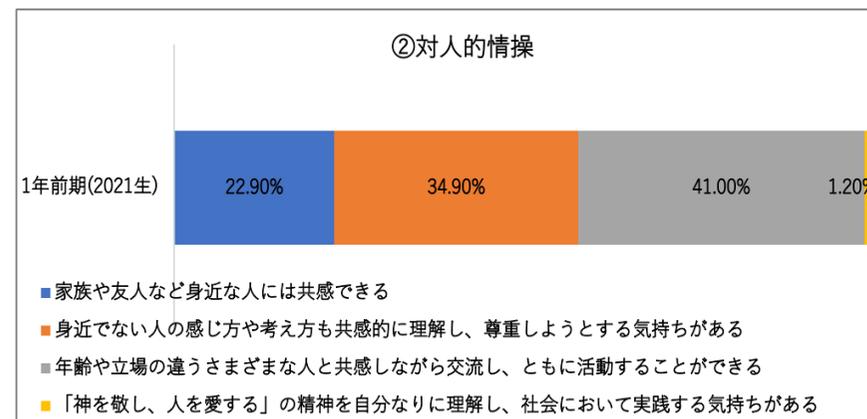
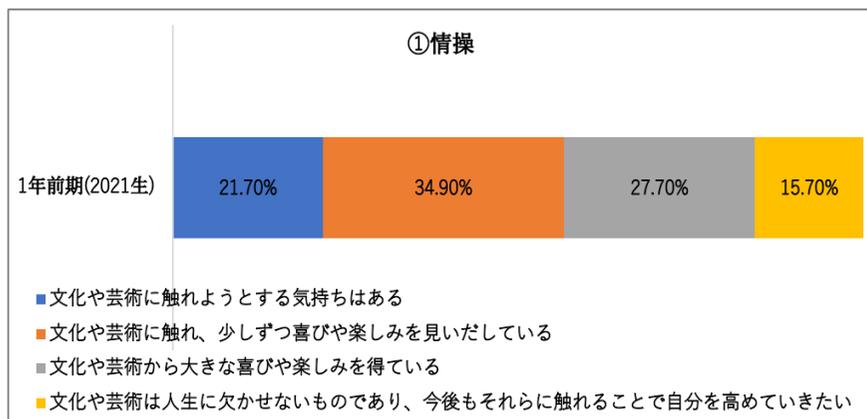


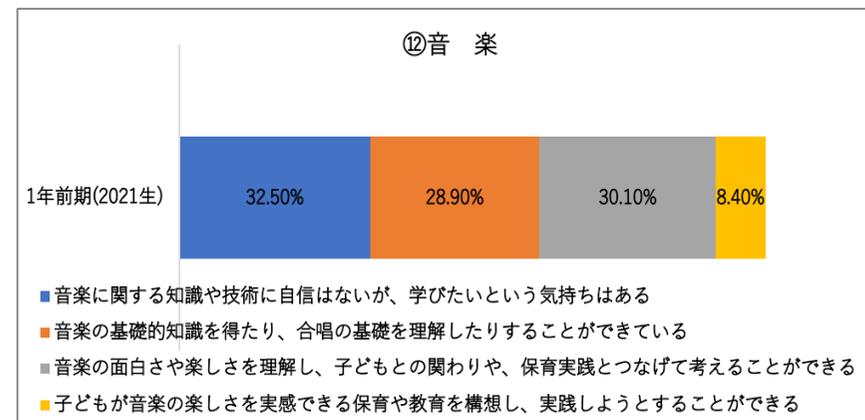
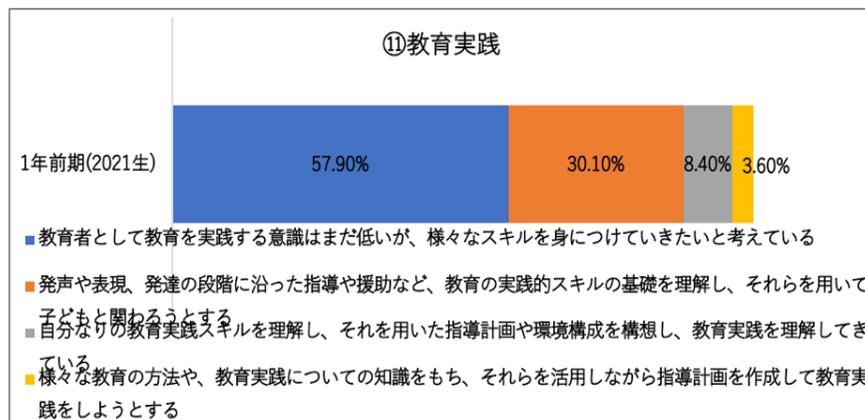
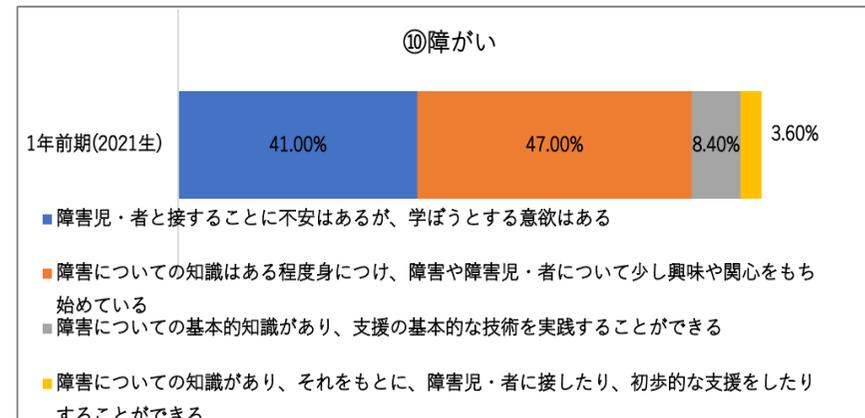
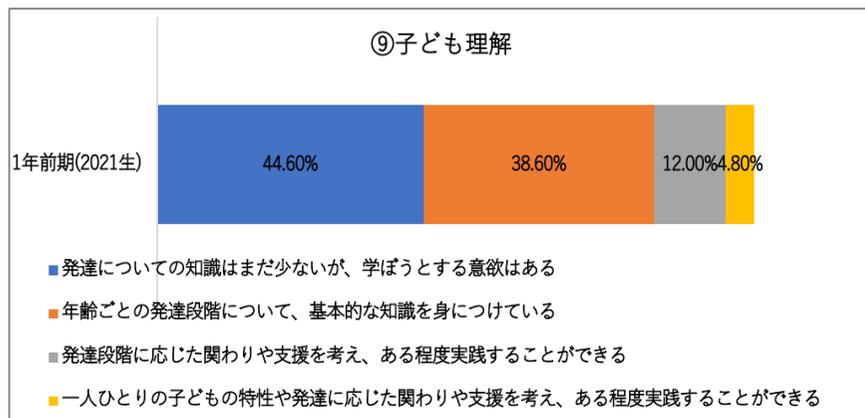
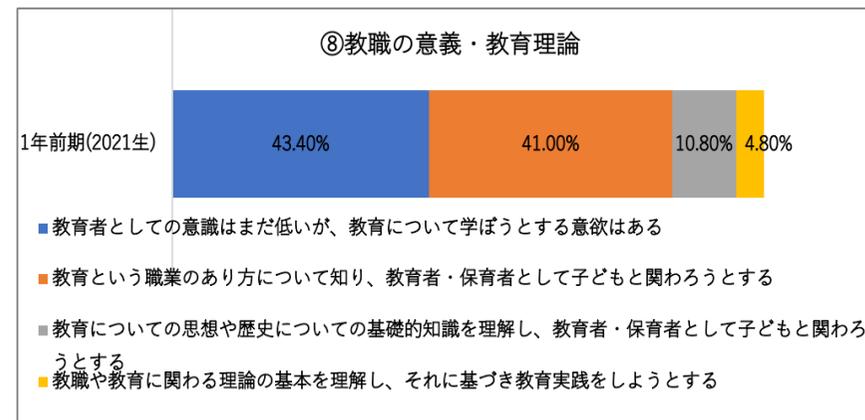
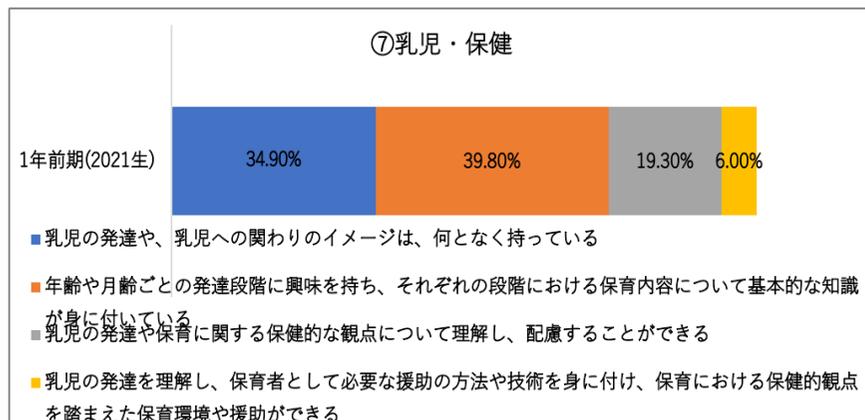


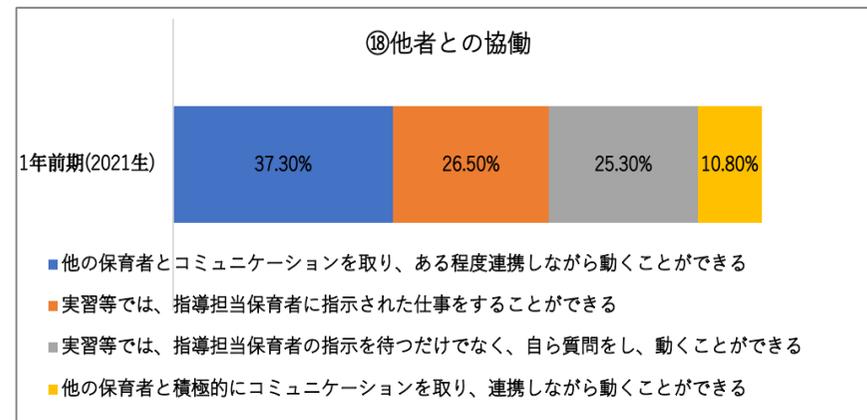
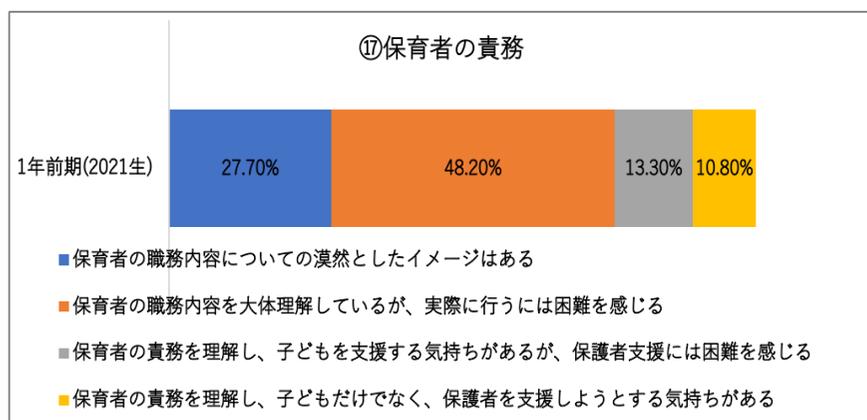
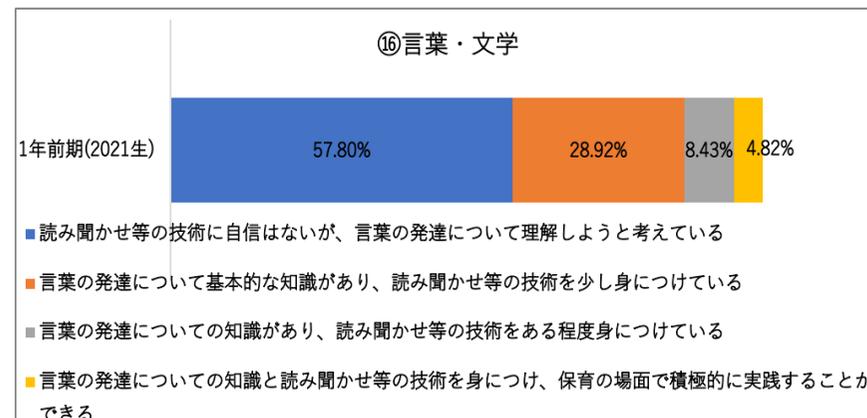
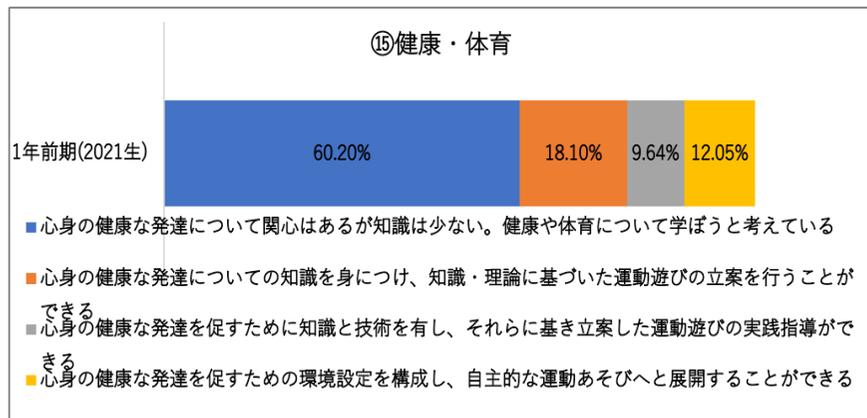
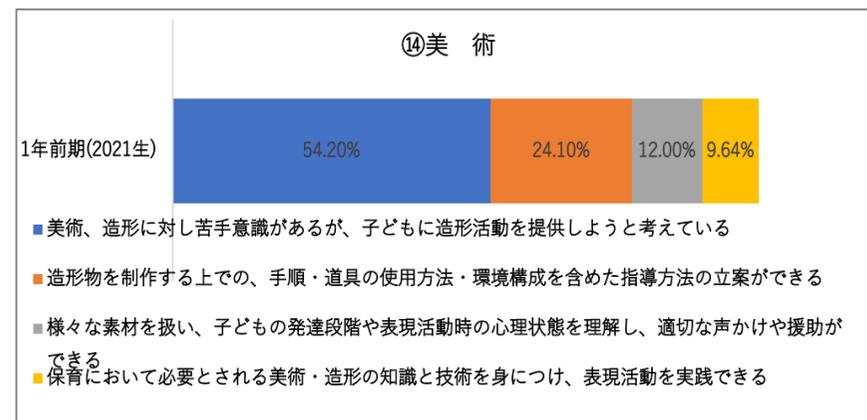
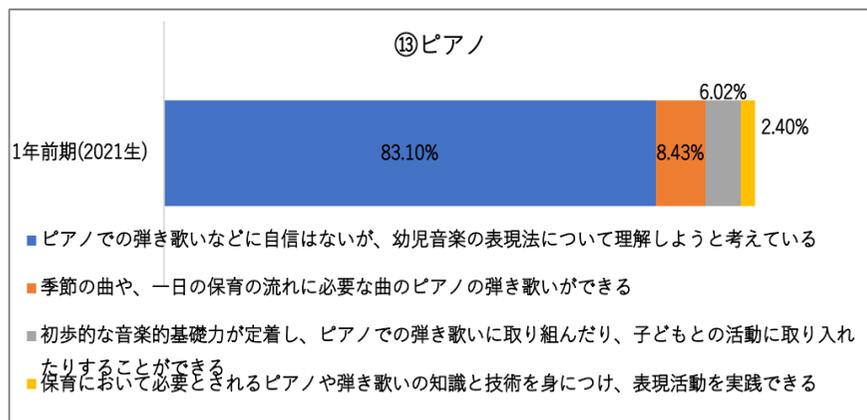












⑩子どもの最善の利益



- 「子どもの最善の利益」という言葉はあまり聞いたことがない
- 「子どもの最善の利益」について、少し知識を得ている
- 「子どもの最善の利益」について、大体理解している
- 「子どもの最善の利益」を理解し、そのために行動する心構えができています

4. 介護福祉学科について

(1)結果の概要

介護福祉学科のディプロマポリシーは表 2 の通りである。

表 2 介護福祉学科のディプロマポリシー

介護実践の基盤となる教養と総合的な判断力および豊かな人間性を身につけている。 1. あらゆる場面に汎用できる介護の知識と技術を有し、自立支援の観点から、身体的な支援だけではなく、心理的・社会的支援を展開できる能力を身につけている。 2. 利用者や家族の援助のためのコミュニケーション能力、的確な記録・記述ができる能力及び介護過程を多職種協働チームにより展開できる能力を身につけている。 3. 介護ニーズの複雑化・多様化・高度化に対応し、利用者や家族等のエンパワメントを重視した支援ができる。 4. 生活の質の維持・向上の視点を持って、利用者の状態の変化に対応できる。

介護福祉学科では、昨年度、上記の改訂前のディプロマポリシーに「介護福祉士養成課程における修得度評価基準としてのコアコンピテンシー」（公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会，2019年3月）を適用する形で、評価の観点を作成した。今年度も2年生は、この昨年度と同様のものに回答した。また、今年度入学した1年生には、今年度改訂したディプロマポリシーをもとに前年度作成した評価の観点を修正し、その中の「豊かな人間性」を明確にした質問を追加し回答した。

介護福祉学科の学生数は1年生が13名、2年生が20名だが、1年生のうち1名が自宅療養中のため回答できず、回収率96.1%（1年生が92.3%、2年生が100%）、有効回答率は100%であった。評価の観点と各項目の評価基準および1・2年生の結果次ページ以降に示す。

2年生のこれまでの3回分の調査結果の推移について、4段階評価のうち2段階以上の回答をひとつにまとめてFisherの正確検定を実施したところ、優位な差が顕著に認められたのは⑤多様な環境や状況に対応した介護を実践する能力（ $p=0.0431$ ）、⑬心身の状況に応じた介護を実践する能力について#その7（ $p=0.0088$ ）、⑮介護過程を展開する実践能力について#アセスメント力（ $p=0.0017$ ）、⑰チームで働くための実践能力について（ $p=0.0005$ ）の4項目であり、2年生前期を終えるころには、2～4段階の評価を多く選んでいることが確認できた。

(2)ディプロマポリシーの検証

1年生の41.6%が、本来、2年後期で達成される最上位の選択肢である「支援が必要な人のその人らしい生活を捉えた支援して、学んだ知識と技術を活用することができる」を選んだ。これは、支援の難しさを実習などで経験していないため、選んだものと考えられるため、引き続き評価を継続していく必要がある。

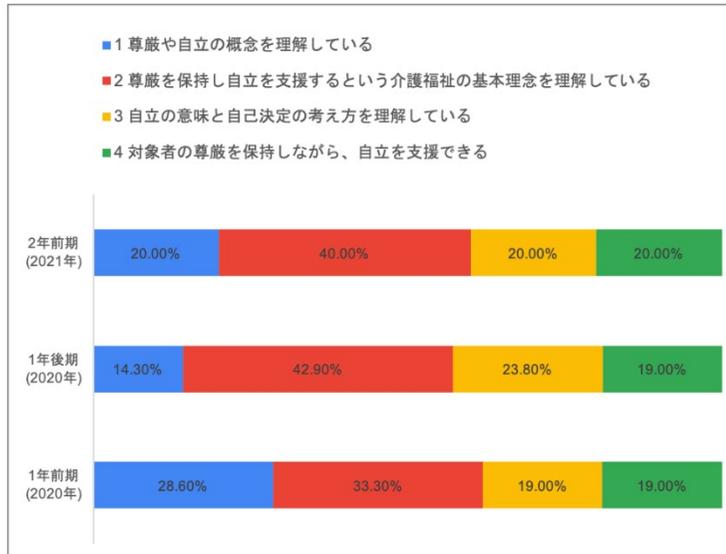
(2)教育活動の見直し

学修成果の評価は、2年生の過去3回の調査結果の推移から見て、実習時期との関係が大きいと考えられる。介護実習による実践の機会は、学修した知識と技術の成果を確認する自己覚知が得られたものと思われる。特に、「心身の状況に応じた介護を実践する能力について」の項目の右肩上がりの推移では顕著に学修成果が表れている。このほか、2年生の推移から推察できるのは、M字型の推移が見られる「対象となる人を生活者として理解する能力について」の項目は、1年前期のまだ実習の経験がない状態で自己評価が高く、実習で実践の難しさを経験したことで、自分への評価の目が厳しくなったことにより下がったものと推察される。これは現在の1年生にも同様の傾向として、自己評価が高いことが窺える。

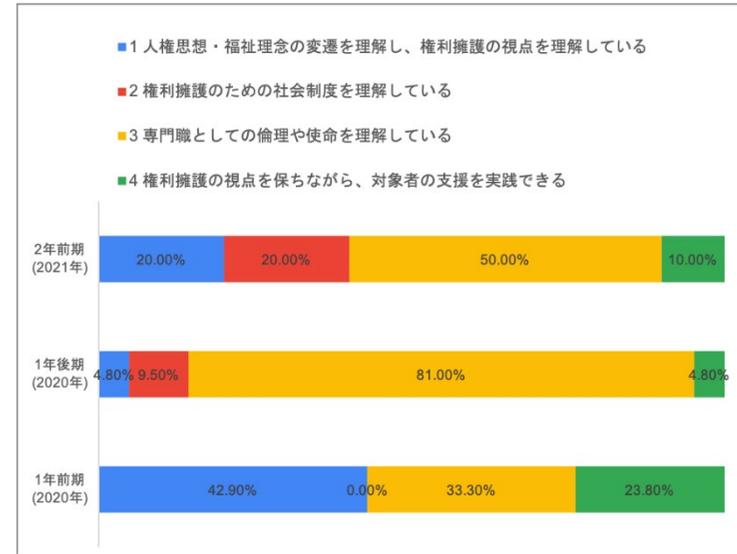
学科として完成年度を迎えたことで、これまでの2年間を振り返り、今年度は、学生がより効果的に学べるように、設置科目の見直しのほか、科目の実施時期の変更や、「生活支援技術」の指導内容の調整などを図って、時間割を大きく刷新した。また、教員の変更や、担当科目の変更など、昨年度との変化が大きいため、その検証もふまえ、教育の改善と強化をすることが考えられる。

これまでの学修成果の評価の推移から、科目ごとの成績評価だけでは計れない指標で、介護福祉士養成の到達度を確認できることが見えてきた。また、学生自身が自ら評価する基準が育つ過程も窺えた。専門科目群の成績は、国家試験合格を達成するため存在感が大きい。国家試験後の介護福祉士としての「豊かな人間性」の素養を涵養するには、こうした学修の成果の評価を通して、教養科目や介護実習、課外活動などの学びが大きいことにも注視し教育活動の見直しを続けていく。加えて、学修の成果を学生自身が評価するとともに、教員による評価と、評価したことの学生へのフィードバックについてもどうするか検討が必要である。

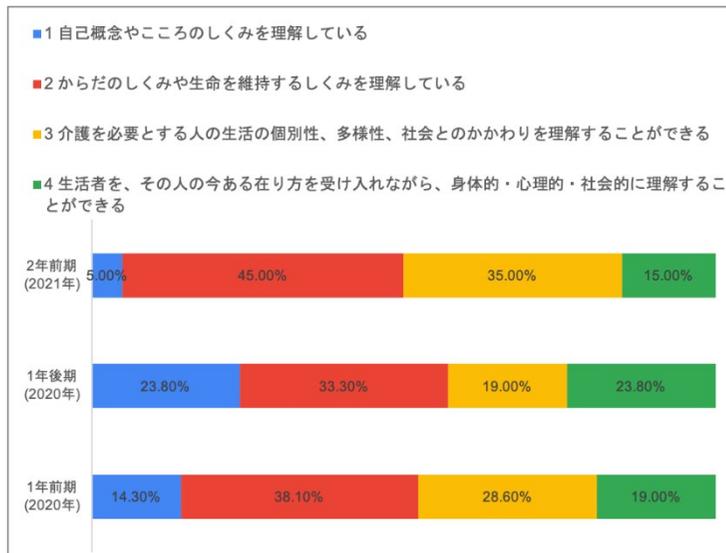
介2年生①尊厳・自立の理解と支援



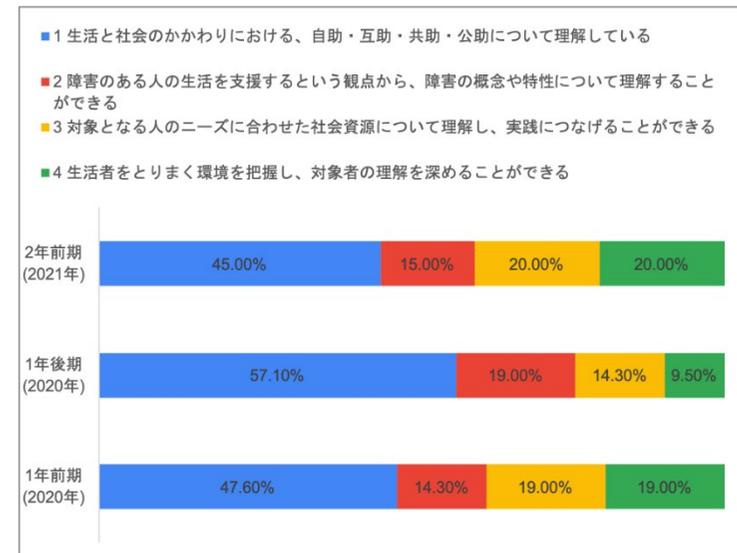
介2年生②権利擁護



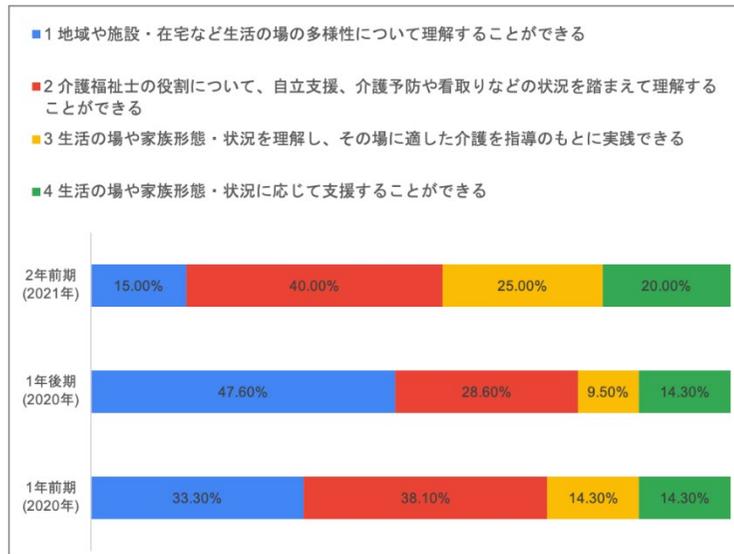
介2年生③心と身体の理解



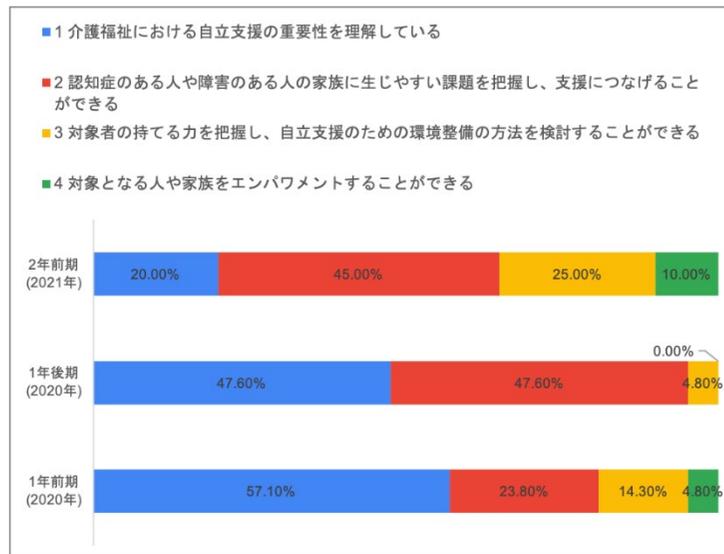
介2年生④社会との関わりの理解



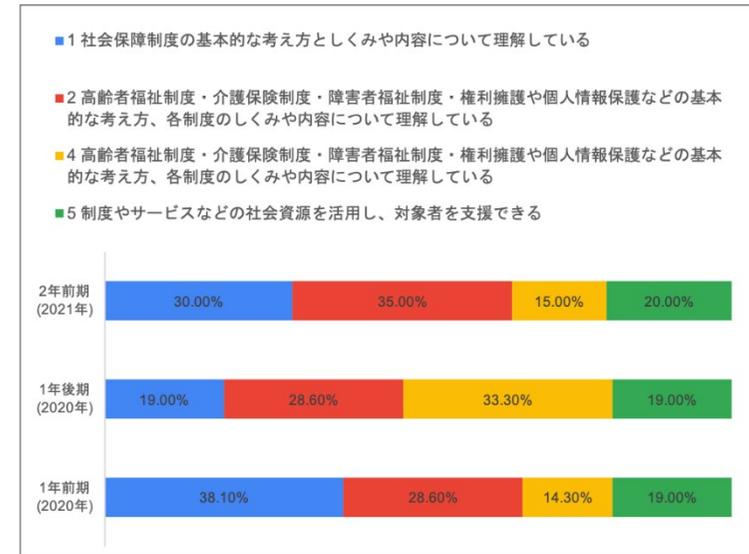
介2年生⑤生活の場に応じた支援



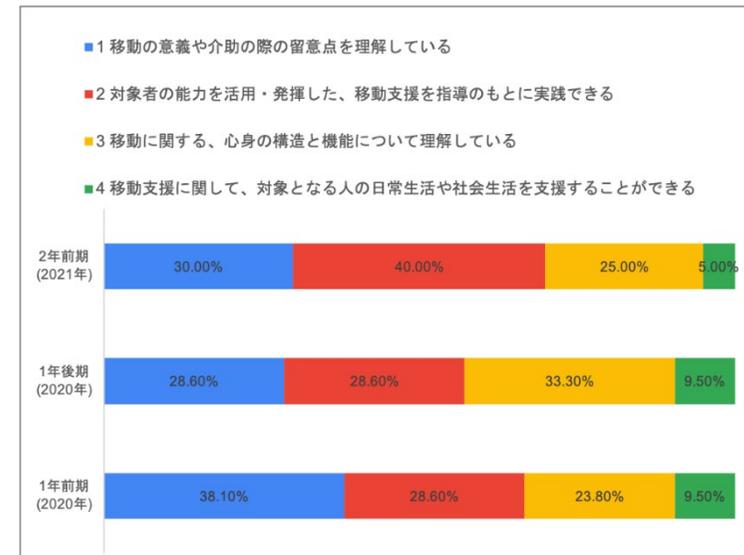
介2年生⑦自立支援



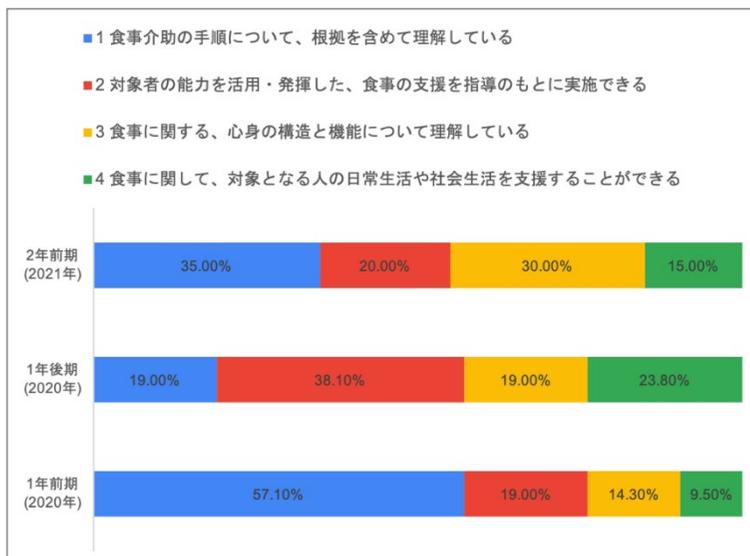
介2年生⑥制度に基づいた支援



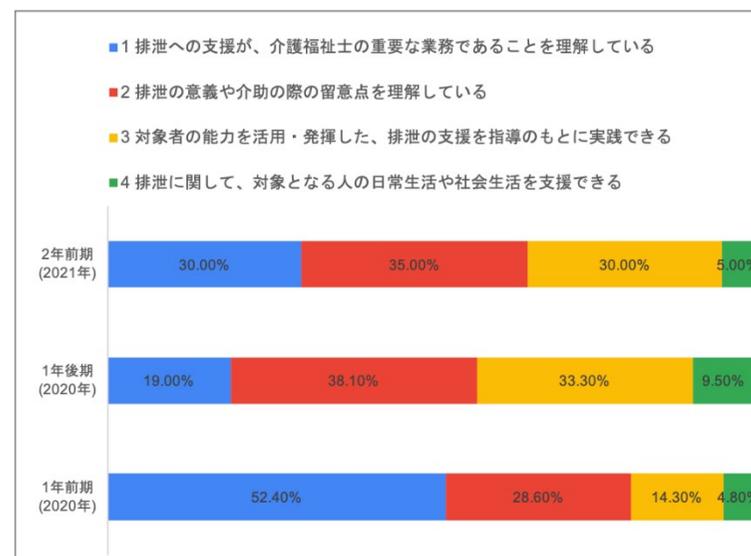
介2年生⑧移動支援



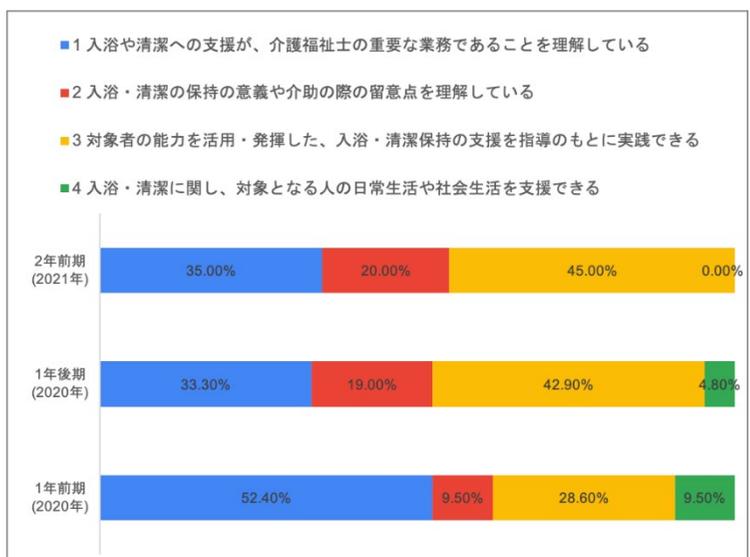
介2年生⑨食事支援



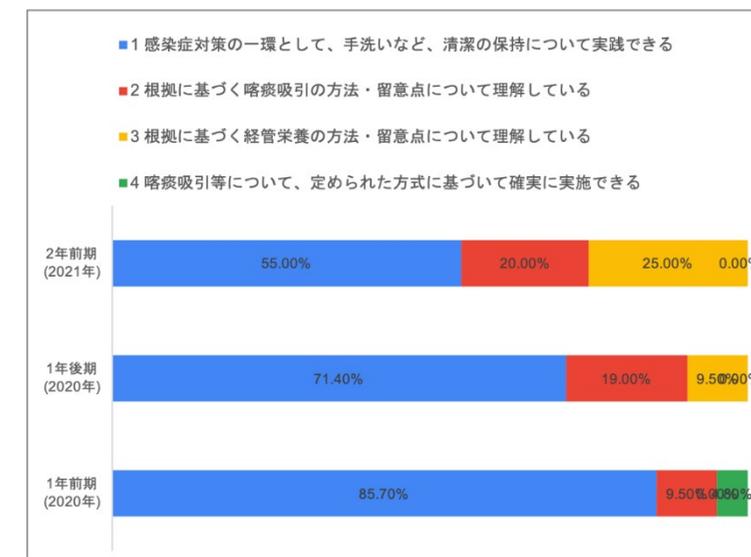
介2年生⑩排泄の支援



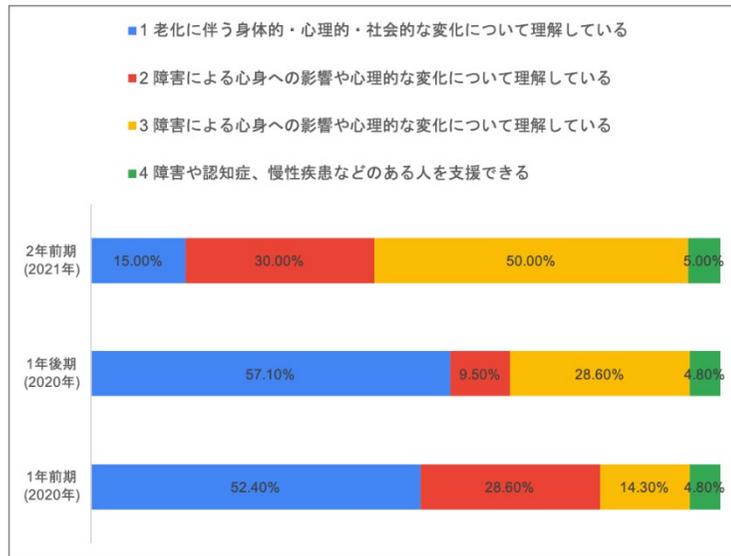
介2年生⑪入浴・清潔の支援



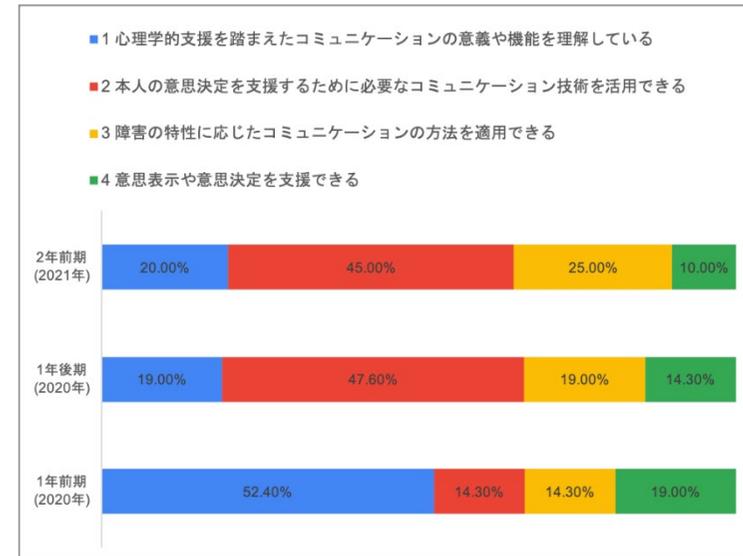
介2年生⑫医療的ケア



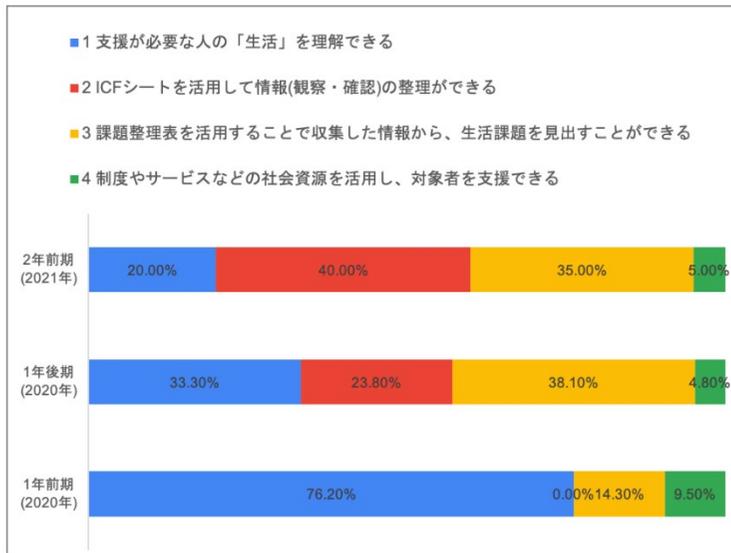
介 2 年生⑬老化・障害の理解と支援



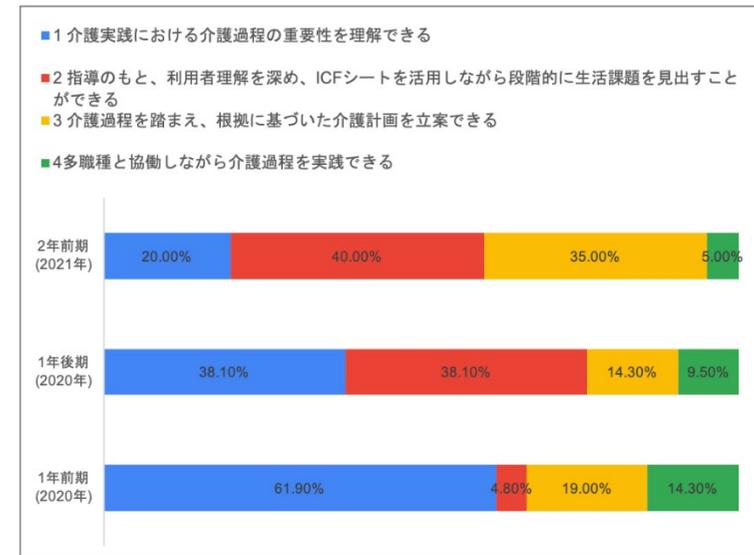
介 2 年生⑭コミュニケーション技術



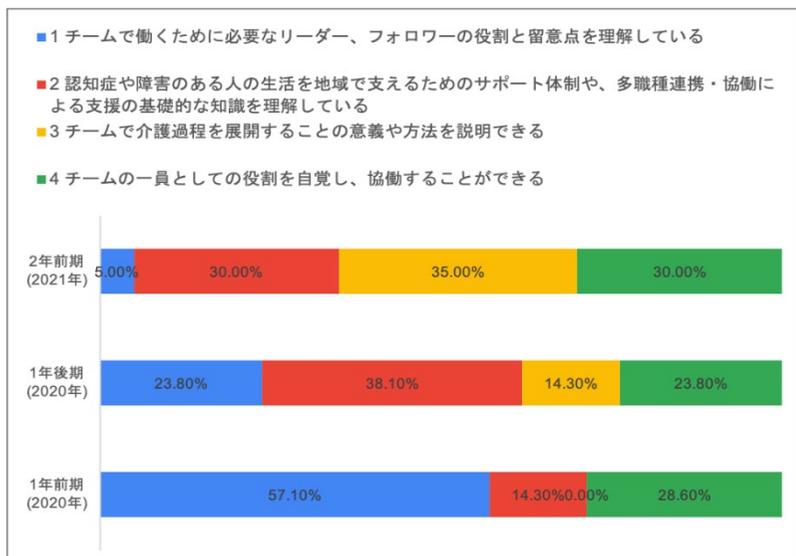
介 2 年生⑮アセスメント力



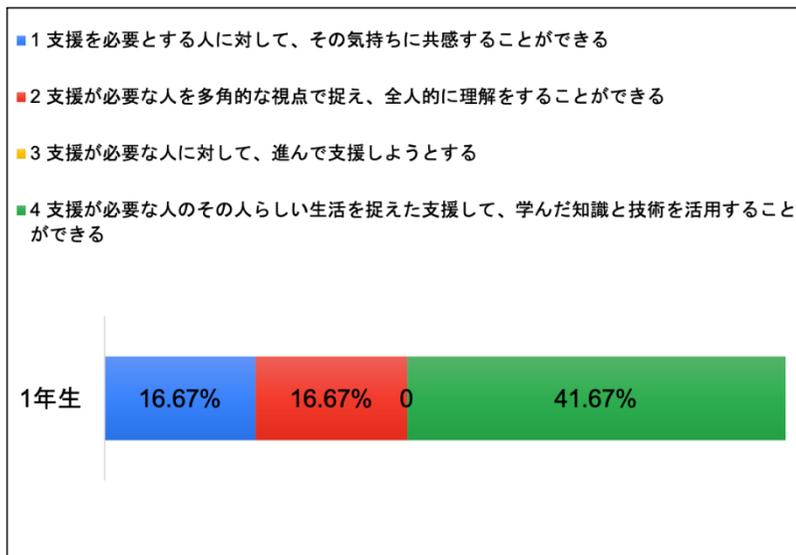
介 2 年生⑯介護計画



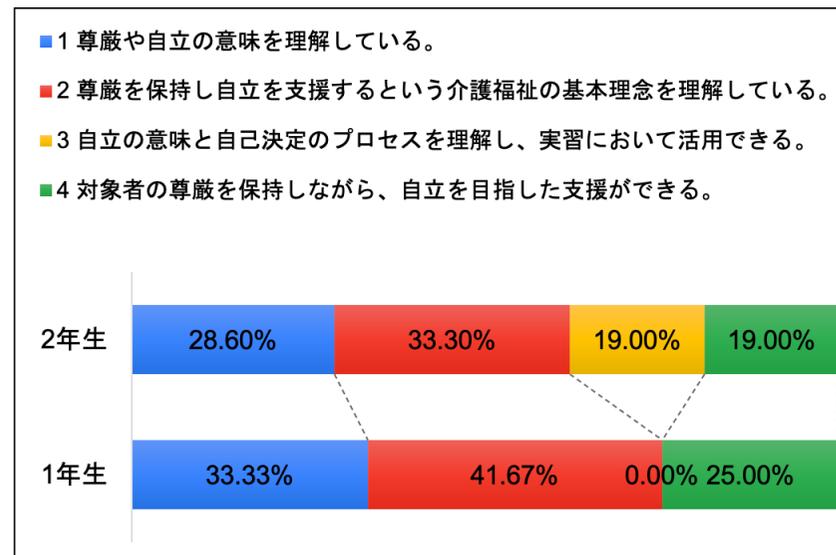
介2年生⑰協働する力



介1年生①豊かな人間性

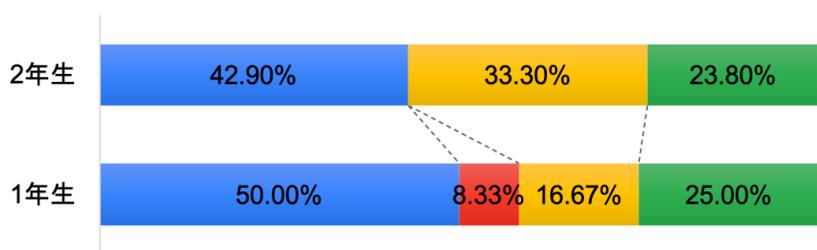


介1年生②人間の尊厳と自立



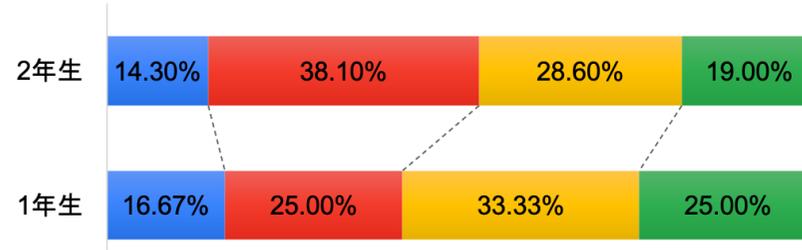
介1年生③権利擁護

- 1 人権思想・福祉理念の変遷を理解し、権利擁護の視点を理解している。
- 2 権利擁護のための社会制度を理解している。
- 3 専門職としての倫理感や専門職者として役割を理解している。
- 4 権利擁護の視点を保ちながら、対象者の支援ができる。



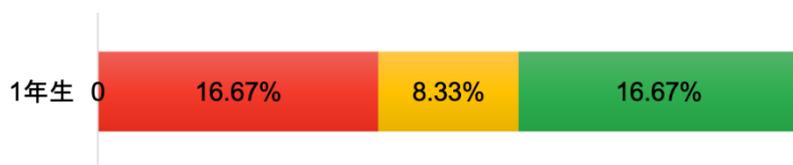
介1年生④多様な生活者の理解

- 1 自己概念やこころのしくみを理解している。
- 2 こころとからだのしくみを理解している。
- 3 介護を必要とする人の生活の個別性、多様性、社会とのかかわりを理解することができる。
- 4 生活者を、その人の在り方を受け入れながら、身体的・心理的・社会的に理解し支援に結びつけることができる。



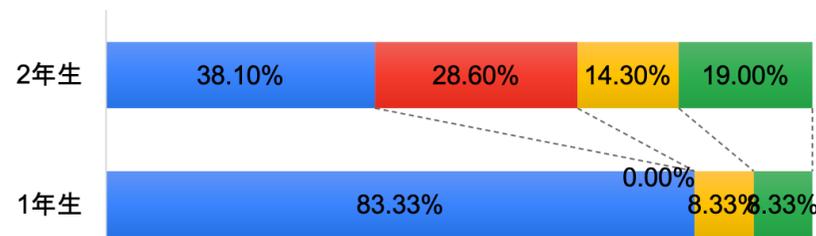
介1年生⑤生活者を取り巻く環境

- 1 生活と社会のかかわりにおける、自助・互助・共助・公助について理解している。
- 2 支援が必要な人の生活の場や家族形態・社会との関わりなどそれまでの暮らしについて理解することができる。
- 3 地域にある在宅・施設など生活の場の多様性を理解し利用者と結びつけることができる。
- 4 生活者をとりまく環境を把握し、その人に適した資源と結びつけ支援につなげることができる。

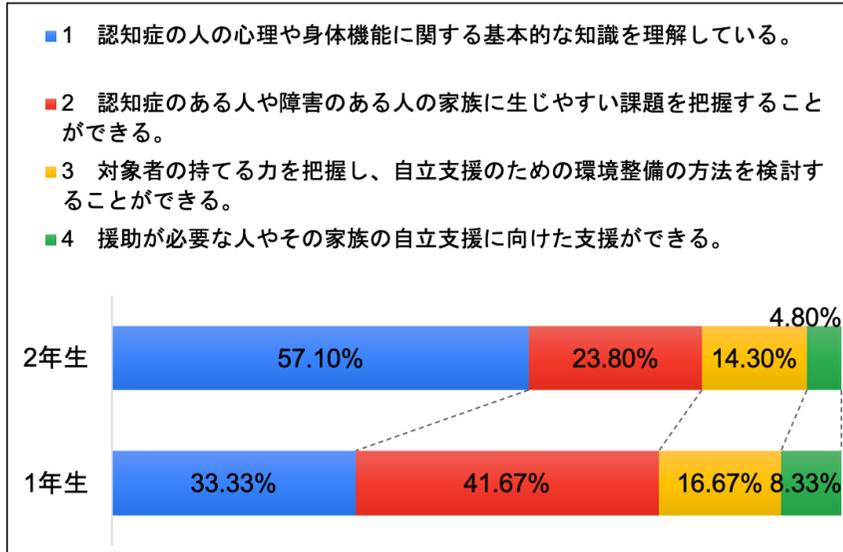


介1年生⑥社会のしくみと法制度

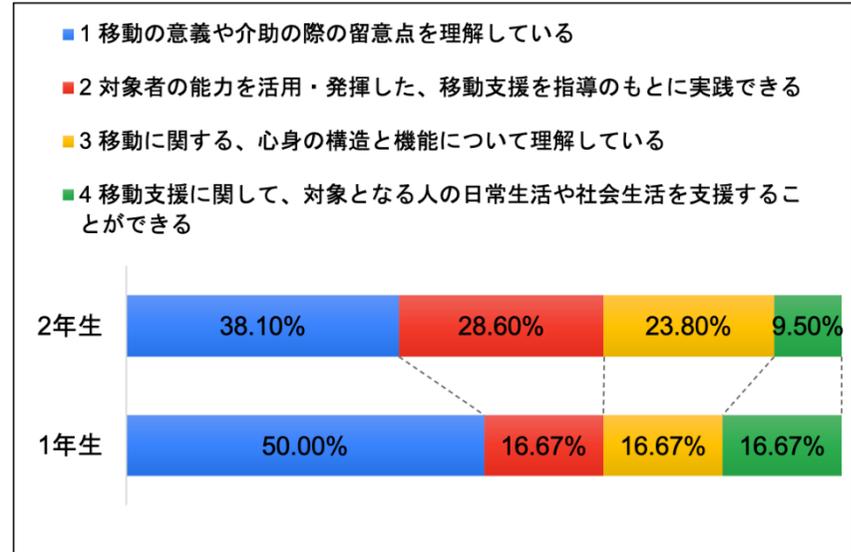
- 1 社会保障制度の基本的な考え方としくみや内容について理解している。
- 2 高齢者福祉制度・介護保険制度・障害者福祉制度・権利擁護や個人情報保護などの基本的な考え方、各制度のしくみや内容について理解している。
- 3 地域共生社会や地域包括ケアシステムの基本的な考え方及び地域包括ケアにおける介護福祉士の役割について理解している。
- 4 制度やサービスなどの社会資源を活用し、対象者を支援できる。



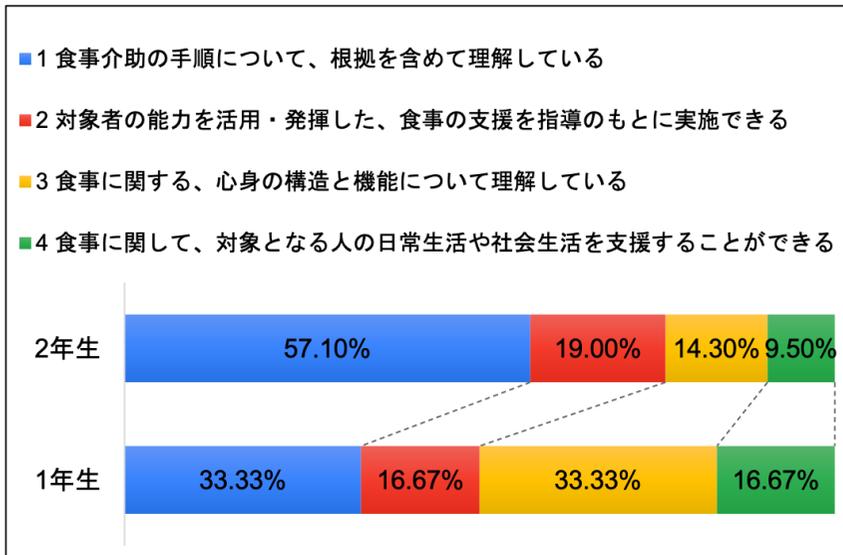
介1年生⑦認知症の理解



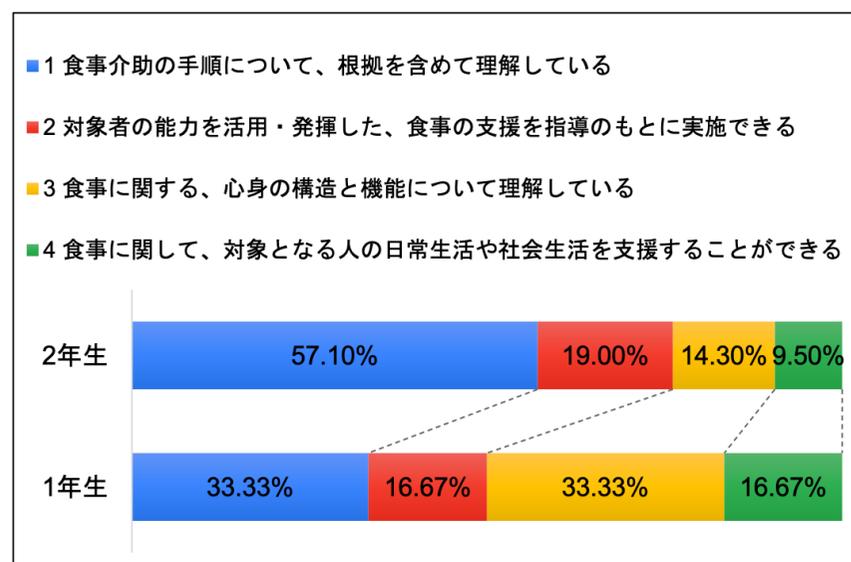
介1年生⑧-1生活支援技術（移動）



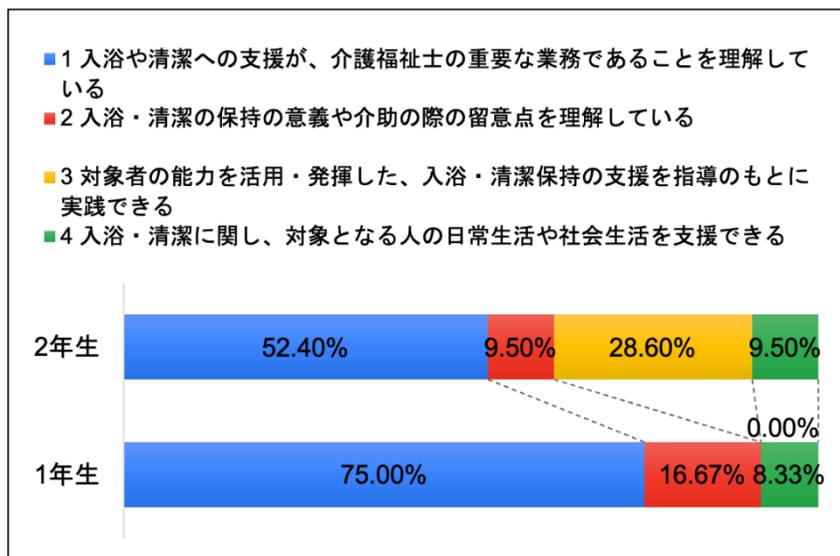
介1年生⑧-2生活支援技術（食事）



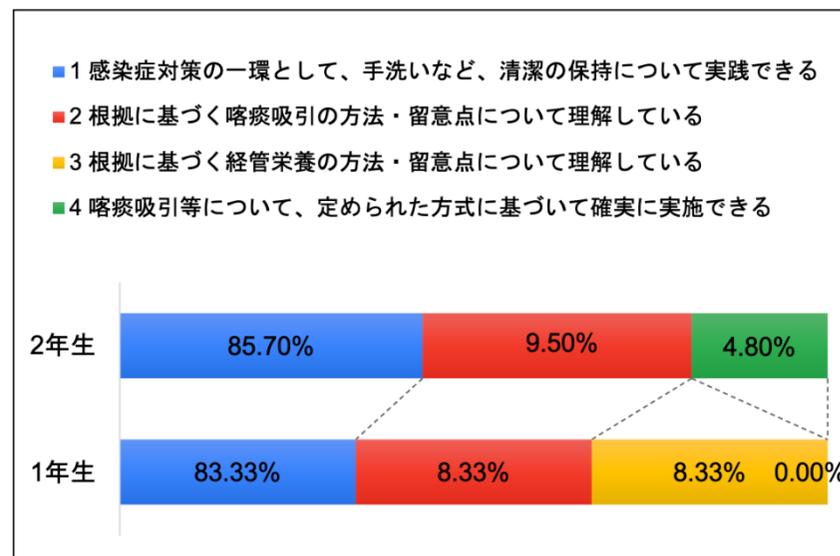
介1年生⑧-3生活支援技術（排泄の支援）



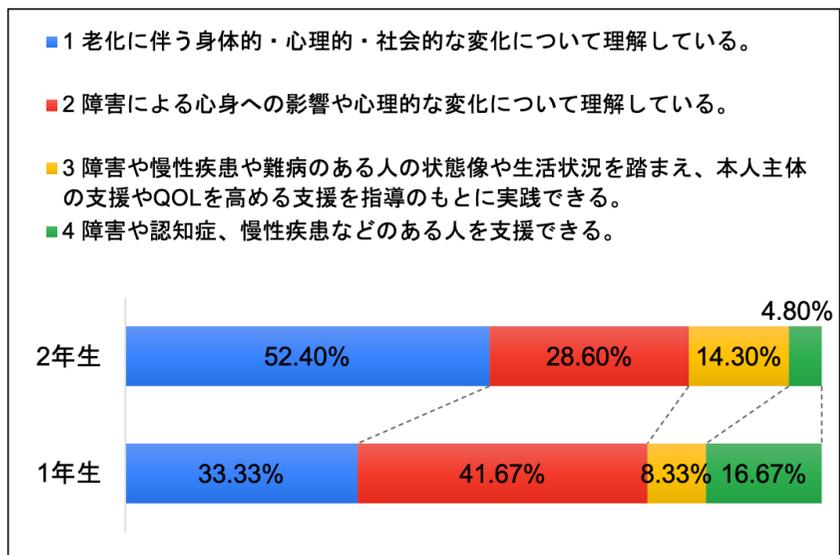
介1年生⑧-4 生活支援技術（清潔と入浴）



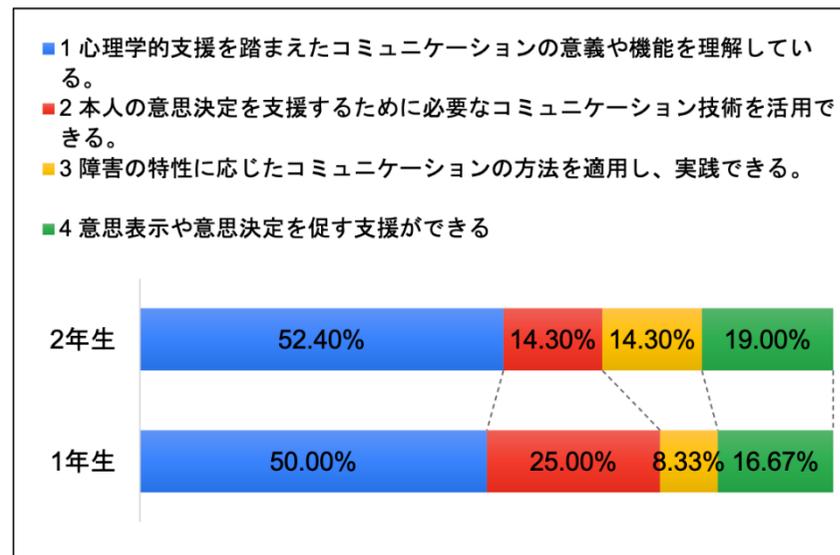
介1年生⑨医療的ケア



介1年生⑩発達と老化の理解

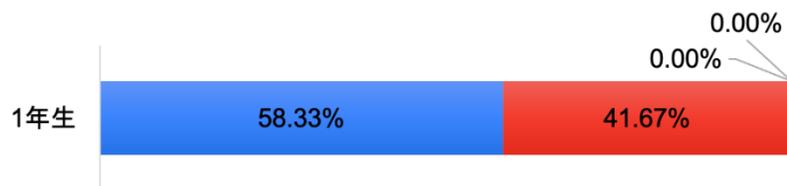


介1年生⑪コミュニケーション



介1年生⑫介護過程の展開

- 1 介護実践における介護プロセスの重要性が理解できる
- 2 ICFシートを活用して情報(観察・確認)の整理をし、生活課題を抽出できる
- 3 介護過程を踏まえ、根拠に基づいた介護計画を立案できる。
- 4 多職種と協働しながら介護過程を展開できる



介1年生⑬チームケア

- 1 チームで働くために必要なリーダー、フォロワーの役割を理解している。
- 2 チームで支援することの意義や方法が説明できる。
- 3 支援が必要な人の生活を地域で支えるためのサポート体制や、多職種連携・協働による支援の基礎的な知識を理解している。
- 4 チームの一員としての役割を自覚し、協働することができる。

